大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年五月一日發行 第一卷第八號

近代思想

五月號

■乞食（詩）……綾男（一）
■トルストイの豫言（翻譯）……ナスタシア夫人（二）
■何が新しいんだ（批評）……榮（五）
■ファウスト論（評論）……荒畑寒村（六）
■役者の藝術（評論）……和氣律次郎（九）
■A夫人に（感想）……佐藤緑葉（一三）
■夜の間（脚本）……荒畑寒村（一六）
■創作試演會（批評）……寒村（二三）
■惑星旅行（小說）……安成貞雄（二四）
■人と超人（脚本）……堺利彥（二七）
■愚劇ファウスト（批評）……貞寒（三五）
■新刊（批評）……記者（三六）
■四月の小說（批評）……寒村（三八）
■大久保より（雜錄）……榮（四〇）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

2-13-442254

Asia Library
AP
95
.J2
K47
no.8

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

第一巻　第八號

乞食

とある町中のはげしい坂道を登つて
乞食が來た……
電話線に雀が囀つてゐる
――その下を通つて。

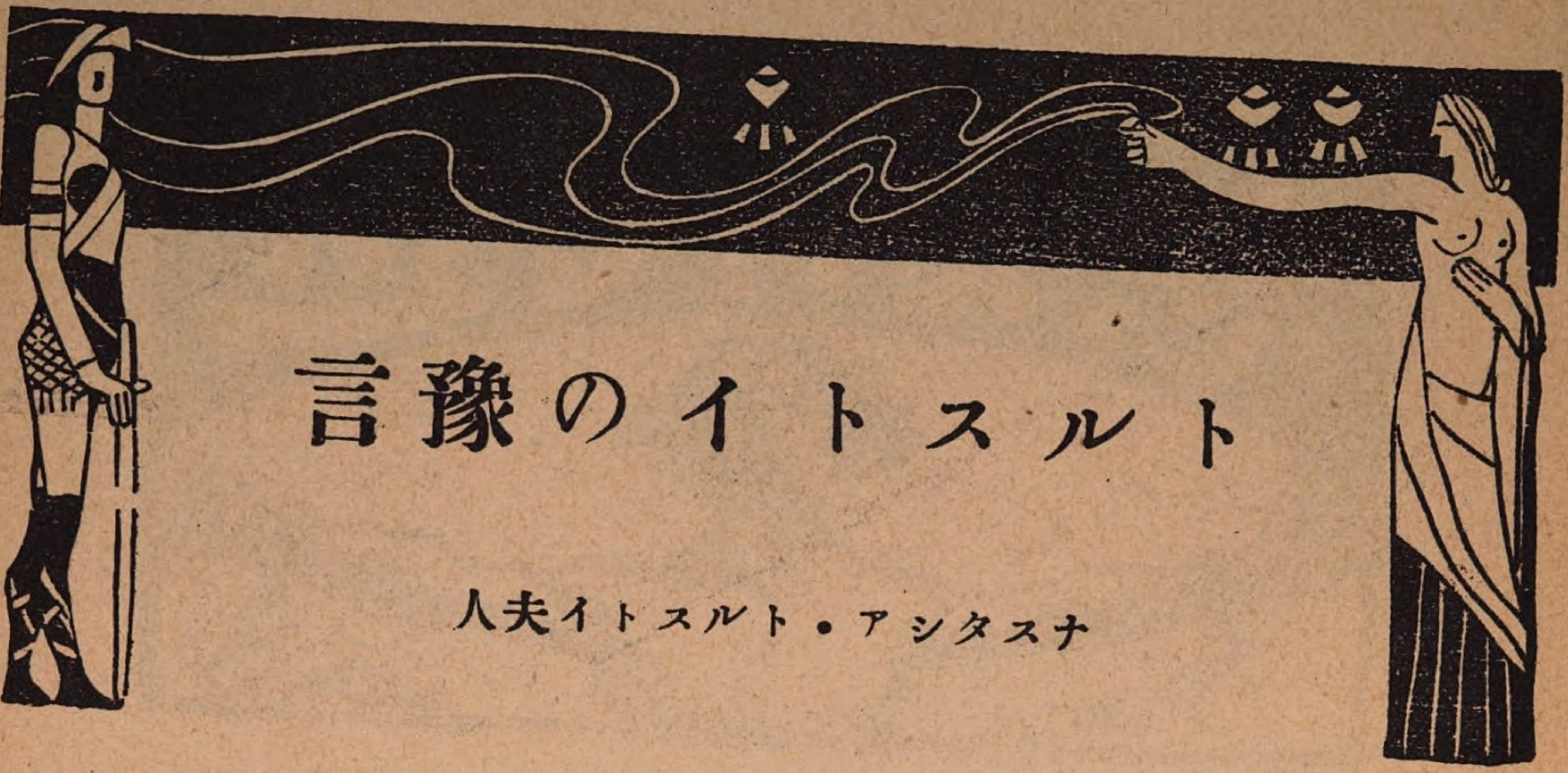
しなびた唇を顫はして
ハツハツと黄色い息を吐きながら
ひよろ〳〵した歩きぶりが
今にも躓きさうに。

血の脱けた枯木のやうな手に
生命の息杖をついて歩いて行く。
――彼れの背中には
古ぼけた大きな包が
魂のやうにくつついてゐる。

沈みかゝつた夕日の光と
冷たい埃をうしろから浴びて、
老ぼけた乞食は
今向うの坂を下りて行く
――死にきれない魂を背負つて――

――綾男――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



トルストイの豫言

ナスタシア・トルストイ夫人

一

一九一〇年の秋、皇后から、ご家族と非公式に話なしに、ペテルホフの避暑殿に訪れて來るやうにと云ふ、お招きがあつた。これは非常な恩寵であつたので、私も大變喜んで、ご避暑地のために設けられた停車場へ、定められた時間通りに到着した。特別馬車は直樣私を御所に送つた。侍從は皇室方が今ヴエランダで茶を召上つておいでになる事を告げた。そして皇后は私を其處へお迎へ下さると云ふのであつた。

皇后はなが〳〵のご不例にまだお苦み遊ばしてゐて、お顔色も蒼ざめ、よほどお弱くお見受けせられた。私は暫くの間、ご健康のご樣子を伺ひ、又宮廷の事などのお話を伺つた。ところが皇后は、皇帝が私に會ひたいと仰せられてゐる事を、私かに私に告げられた。勿論このやうなお言葉は一の命令である。皇帝は皇女達や女傅達とご一緒に、象棋を遊んでゐられた。そして皇后はそのご用をお告げ遊ばすやう、皇帝に申上げられた。

『伯爵夫人！』皇帝は手輕に仰せられて、『わしは妙な秘密の使命をお前に話したいのだが、どうも頼みにくい事なので……』と、急に言葉を切つてお了ひ遊ばされた。そして私が皇意に應ずるか否かをお疑ひ遊ばすやうに見えた。

私は丁寧にお辭儀をして、『陛下！私は陛下の仰せを承はるのを、この上もない仕合せに存じます。』と申上げた。

『それでは』と陛下はうろみ聲で話し出された。『獨逸皇帝と英國王とが、わしに困つた依頼をして來て、我が老伯トルストイから直接の書信を得たいと云ふ、頗る妙な好奇心を傳へられた。だが、固よりわしはそれを拒む事は出來ない。と云つて、何うして此の事を果していゝか分らぬ。又實を云へば、お前も知つてゐやうが、わしは老人の著書や説教をあまり好かないんだ。ところが皇后はお前をよく知つてゐるさうだし、それにお前は老人を個人的に知つてゐると云ふ事だから、今日かうして呼んだ譯だ。お前は老人と親戚の間柄と思ふが……よろしい、それでは老人がお前を通じて、わしに友誼的に書面を送つてくれるやうにお前から傳言してくれまいか。わしはそれを英國王と獨逸皇帝とに送る事にしやう。そしてそれは今迄世間に發表した事のな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

い、又今後も決して老人自身が發表しないものでないといけないのだが。」

『陛下！私は陛下の特別な御恩寵を感謝いたします。』私はお答した。『私は早速伯爵を訪問いたしませう。』

「その書面を得たなら、すぐ宮内大臣まで知らして貰はう。わしはすぐお前に會へるやうに取計つて置くから。」と陛下は仰せられて、私にお手をお延ばし遊ばした、それから私は約半時間ばかり、いろ／＼時節柄のお話をして、お暇を申上げた。

二

一週間の後に私は大伯父の田舍の邸に客となつた。そして簡單に私の來意を告げると、老人は物めづらしさうに聞き終つて云つた。

「それは妙だ。私は喜んで王皇方に書面を送らう。だが困つた事には、私はこれまで何時も群集に書面を送つたが、宮廷の儀式的言辭には不得手なんでな。しかし何んとか考へて見やう。」

「大伯父さま！あなたは何にか政治的性質の夢想か、それとも廣い國際的規模の豫言をお持でございませう」と私は質問した。

「それは善い思ひつきだ」と老人は叫んだ。「私は小説として公けにし得ない、ある本當に奇妙な經驗を持つてゐる。此の二ケ年ばかり何んだか私に憑きまとつてゐる。私はそのもの〻性質を何とお前に云つてい〻か分らぬ。私はこれを夢だと云ふ事が出來ない。なぜなら私は机に座つてゐる時にも、折々これを見る。時としては夕暮に、晩餐の前にも現はれて來る。私は幽靈を信ずるものでもない。現象の神靈的説明を信ずるでもない。けれども私は此の不思議な事柄を何うしても説明が出來ない。」

「それは夢想ぢやないんですか」と私は口を出した。

「何にかそんな種類だらうが、しかし極くはつきりしたものなんだ。私はその出來事を總て明かに描く事が出來る程、はつきりしたものなんだ。それに私は此の夢想を意のま〻に呼起す事も出來る。お前が此處にゐる間に、それを呼起す事も、確かに出來る。只困るのは、その夢想の現はれる間、兩手が全く麻痺して、私は何んにも聞く事が出來ないやうになる。」

「では、私があなたの仰しやる事を書けば善いでせう」私は老人に迫つた。

「よし、それで事はきまつた。すぐ何にか試みる事としやう。其處の机に紙と鉛筆とあるが、それともペンを使つても……何ちらでもお前の好きなやうに。」

三

二三分間私は鉛筆と紙を手にして、大事な時の來るのを待つてゐた。老主人は椅子に凭つかゝつて、片手で兩眼を覆ふて、一寸昏睡狀態に陷つたやうだつた。そして十分間程全く身じろきもしないでゐた。が、やがて失神したもの〻やうに起上つて、低いうろ聲で話し出した。

『これは近い將來に現はれる世界的性質の出來事の默示だ。その無形の輪廓が今私の眼の前に現はれてゐる。人類の運命の海の上に、裸體美人の巨像が浮かんでゐる。その美、その姿、その微笑、その寶石、彼女はヴィナスを超えてゐる。國々は爭ふてひとり其の寵を得やうとして、狂氣のやうになつて彼女のあとを追ふてゐる。けれども彼女は永遠の遊女のやうに、誰れとでも媚態を交はしてゐる。彼女の金剛石や紅玉の髮飾りには、『商賣主義』と云ふ、彼女の名が刻まれてある。そして彼女は人の魂を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

奪ひ血を迷はして、その起き上ると共に幾多の破壊と苦悶とを伴はせる。貪慾な取引から出る彼女の息と、黄金のやうな金屬性の彼女の聲と、そして貪婪飽く事のないやうな彼女の眸付とは、あらゆる國々をして其の魔力の犠牲に墮して了ふ程の毒を持つてゐる。

『見よ、彼女には、その手に三本の普遍的腐敗の松明を持つた、三本の巨大な腕がある。第一の松明は戰爭の焔である。美はしき此遊女は、國から國に、都市から都市に、これを携へて行く。愛國心は忠實な焔の火花を以て迎へる。そして結局は大砲小銃の響きだ。

『第二の松明は頑迷と僞善の焔である。これは只寺院や又は神聖な諸建物の祭壇の燈をともして、虚僞と惑信との種子を播いて行く。そしてまだ襁褓の中にゐる赤兒の心にたきつけ、遂には墓場の中まで隨いて行く。

『第三の松明は法律の焔である。有らゆる據り所のない傳習の危險なる基礎の焔である。此の松明は先づ家庭の中に其の致死の仕事を遂げて、次ぎに文學や美術や又は經國のより廣い世界を一掃し去る。

四

『一九一二年に、此の第一の松明によつて南東歐羅巴に放たれた大火事が始まる。これは一九一三年に及んで、一大に破壊的災禍となつて擴がる。この年に私は全歐羅巴が火焔と鮮血とに包まれるのを見る。廣大な戰場の悲鳴の聲を聞く。けれども一九一五年頃に、北歐から一怪物新那翁が現はれて、此の血なまぐさい舞臺に登場する。彼れは多少の軍事的教育ある文筆の士若しくば新聞記者であるが、一九二五年迄には全歐洲を掌握して了ふ。そして此の大災禍の最後が、舊世界に一新政治時代を劃する。帝國も王國もなくなる。世界は國々の合衆聯邦を形づくる。そしてアングロサクソン族と、ラテン族と、スラヴ族と、及びモンゴリア族との四大巨人のみが殘る。

『一九二五年後には、宗教的感情の一變するのを見る。彼の遊女の第二の松明は教會を倒して了ふ。倫理的思想は殆んど消滅する。人類は道徳的感情がなしになる。けれども其時に一大改良家が出て來る。彼れは一神論の遺物を此の世界から一掃して、汎神論の寺院の親石を置く。神とか靈とか魂とか又は不死とかは、一新鑛爐の中に溶かされて了ふ。そして私は新倫理時代の平和的曙光を見る。此の使命を帶ぶるものはモンゴリアン・スラヴである。彼れは既に地上に歩み出してゐる活動的人物である。しかし彼れはまだ、至上の權力者から與へられた此の使命を自覺しない。

『又第三の松明の焔は、既に吾々の家族關係と及び吾々の藝術や道徳の立場を破壊し始めた。男女の關係は兩性の沒趣味な結合として認められて來た。藝術は寫實的頽敗に陷つた。政治的及び宗教的騷擾は、有らゆる國民の精神的基礎を搖り倒して了つた。只其處此處の小部分の土地が、彼の三大破壊的火焔に觸れないで、殘つてゐるに過ぎない。歐羅巴の非國家的戰爭と、亞米利加の階級闘爭と、及び亞細亞の人種的戰爭とは、實に半世紀の進歩を阻害した。けれども現世紀の中頃に、羅典人種の間から起つて、此の世界から冗慢倦怠の駄作を一掃し去つた、文學及び美術の一英雄が出た。それは『商賣主義』の暗夜を照らす象徴主義の光明である。今日の多夫妻制と一夫一婦制との代りに、詩的夫婦制が來た。即ち兩性關係を人生の詩文概念の上に立てたも

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

のである。

『そして私は、國々がだん／＼賢明になつて、彼等の運命を支配してゐた彼の傾城の遊女の要するに幻影に過ぎなかつた事を悟つて來るのを見る。世界はもう軍隊も僞善的宗教も、又墮落せる藝術も必要のなくなる時が來る。人生は進化である。そして進化とは、心身の單純より益々復雜に進む發達である。私はこんな風に、丁度高い山に入日の光輝が消えて行くやうに、世界的戲曲の演ぜられるのを見た。『商賣主義』の一擧手一投足と共に、新しい歷史が始まるのである。』

五

故著述的改良家は此の言葉を終つて、目を開いて、一寸當惑して私を見た。

『私は眠たやうだが』と彼れは私に尋ねて、そして『いや、どうも失禮』とわびた。

私はその夢想物語を彼れに讀んで聞かした。彼れは愼重に聞き終つて、全くその通りだと云つて首肯いた。そして彼れは私の要求に從つて、此の文書に署名して、一寸戴いて私に渡した。即日私は老人を辭して、歸るとすぐに皇帝に謁見を申し出た。

私は非公式に宮廷に參上して、皇帝の書齋に案內せられて、此の書面を陛下に差上げた。皇帝はむつとせられたやうな風で披いて　憤激の色を現はに出して讀まれた。

『これは大變面白い。わしは自分の處に一つ寫しを作つて、外の寫しは飜譯を添へて先づ獨逸皇帝に送り、そこから又カイゼルを通じて英國王に送つて貰はう。そして原本はわしの記錄所に保存する事にしよう。又わしはカイゼルとキングとに、この事に就いては何んの註解も加へないやうに賴んで置かう。わしがふだんから餘り其の謀叛的文書を好まないあの老人と、諸國王との間の仲介者になつたなどゝせられては困るからね。』

私は今、此の王皇のお　と方が、其の自傳の中に此の秘密文書を挿まされると云ふ事を聞いたので、それに就いての全く本當の事と、及び何うして私が此の異常な文書を貰つたかと云ふ事とを、此處に公けにする機會を取つた。皇帝が屢々私に仰せられたのには、カイゼルはこれを現代の最も感銘の深い文學的豫言だと云はれてゐるさうである。

（ジャパン・タイムスより）

何が新しいんだい

榮

四月號の『新公論』に、『男性に對する要求』と題した、岩野清子女史の文章がある。實にあきれ返つた名論だ。

『日本の男性は女性に對してあまり粗暴である。謹みをかいてゐる。女性の前で猥褻な話を好んでする傾がある。……英國あたりの紳士と云はれる人々は、婦人の居る席では胸より下の事は決して口にしないさうである……女性をして憤慨させ或は醜恥心を起させる言語動作を謹んでもらひたい。日本服にあぐらをかいて脛や太股を出すやうな不謹愼な事のない樣にしたい。女性に對する時、醉つてゐてもらひたくない。狎れ／＼しい態度や言語もつゝしんでもらひたいと思ふ。』

妻を呼ぶのに、オイコラなどゝ云ふ人がある。あれを持つて來い、これをしまつて置けなどゝ殆んど下女書生に對して云ふのと同等な言葉使ひをする夫がある。』

英國の僞善紳士を難有がつたり、妻を下女や書生と違うものと思つてゐる所などが、實に滑稽極まる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ファウスト論（下）

——社會主義的見地から試みた批評——

荒畑寒村

四

翻つてメフイストフエレスを見るに、その現はれる物所によつてその役割も些しづゝ異つて居るが、然も之を一貫して著しく目立つものは彼が代表的のサタンで無い事だ。假令ば序言に於て、彼は恰かも滑稽な道化者のやうな役を勤めて居る。（『フアウスト』第一部『天上の序言』參照）彼は近代的な、そして墮落せる惡魔であつて、極めて敏活で、また甚だ悲觀的である。神は彼を無賴漢、理窟屋、嘲笑者、虛飾家と呼び、自分では『惡を希うて善を作す者』同上第一部三三五參照）と云うて居る。彼は如何な種類の目的をも、大望をも、憧憬をも鈌き、如何な嚴肅なる問題に對しても、常に輕躁で、嘲笑的で、そして僞善である。彼は魔女をして已れをサタンと呼ぶを禁じて男爵閣下と云はしめ、そしても う、角も尾も爪も取つて、すつかり近代化して了つて居る。（同上第一部二五〇五參照）その幸福の理想は單に肉慾的快樂に過ぎないで、フアウストの死後、その靈魂を取戻しに來る天使を挑みさへするが、しかし純淸なる愛と當面しては、流石の彼も自身の無力を感ぜざるを得ぬ。實に斯る間に在つて猶且つ冷嘲せんとするは、グレーチエンが彼の居る時に祈る事の出來なかつたよりも、更に困難な事であつた。故に此の惡魔たるや、此の戯曲全體の中世的舊敎の色彩なり調子なりと調和するには、寧ろ餘りに近代的であつて、邪思慾念を人格化せるものとしては明に失敗である。

フアウストの第二部に於て、ゲーテが眞に要求したものは、もつと新しい種類の惡魔であつた。個人生活の放恣を現はせるメフイストフエレスの役割は、第一部に於ては甚だ似つかはしいものであつたが、第二部のもつと廣い社會生活、殊にアクト第四及び第五に於ては、全然失敗である。『主權と財產』とに對つて努力するフアウストに、メフイストは出來る限りの助力はするものゝ、猶之れを目して『愚な事だ』と嘲けつて居る。惟ふにゲーテ自身の立脚地からすれば、此際に於ける眞實の惡魔は、フアウストを導いて革命黨の首領たらしめ、王と社會を亡ぼさしむる志であらねばならなかつたが、然しそうなるともう所謂文學では無くなる。私有財產制の時代に於ける一切の文學は、紳士閥の科學と同じ制限に束縛されて居て、當時の社會的滅亡といふ瀨戶際で恰ど巧く止るものなのだ。

五

若し一面に於て、フアウストが全人類の模型では無く、彼自身の云ふが如く『才能ある人間』として、若くは神が彼を評するが如く『善良なる人間』ならば、ゲーテは如何にして善人は救はる乎といふ事を示す爲に、善良な人間を選んだのだ。然し乍ら、吾々が知らんと欲する處は、人が惡魔に誘惑さるゝに先だつて、如何にすれば善良に且つ能才になれる乎といふ問題であるが、ゲーテは之を吾々に語るのを忘れて居る。此の戯曲の序言に於て、神は『人間はその努力する間は迷ふ』（同上第一部三一五參照）と云て居るが、是は換言すれば、メフイストの對照たるフアウスト

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は、常に善良を希ひつゝも、盲目にそれを手探つて居る間に惡事を爲す。然しその行ひの惡にも拘はらず、動機が善良であつた爲めに救はるゝといふに外ならぬ。實にゲーテのファウストを描くや、墮落して救ひを求むるといふ人間で無くして、初めから惡魔も毀ち難く、境遇も亡ぼし難き、生れ乍らの善人であつた。然し是は單に殆んど例外ともいふべき善良な、そして才能ある人にのみ當て嵌るべきものであつて、善良な個人とか、才能ある個人とかいふ者が、毫も遺傳と、境遇と、教育とに關はらず、偶然に出來たり、若くは自分の心の持ちやう一つでなれるものだ等といふのは、笑ふべき無智に過ぎぬ。自然は善と惡と截然と區別する道德律は作らない、是を作るものは實に社會である。個人は單一であつて、決して一は善、一は惡といふ風に、嚴然と二つに分けらるゝものでは無いのだ。

抑々道德的若くは社會的の意味に於ける善惡の觀念は、私有財產制度の成立、及び資本家對勞働者階級の峙立以後に起つた事で、此の資本家階級に對する服從若くは反抗の態度、即ち此の社會的特權階級に對する個人の出やう如何に依て、善惡の標準が定まるやうになつたのだ。假令へばプラトーの云ふ處に從へば、支配者は必然に善良であつて被治者は惡である。之を人間に見るも、その意志行爲を支配し決定するものは理性であつて是は善である。然し感情や食慾等は從屬的部分であるから惡である。故に眞に善良なる、即ち理性的な人間は、よく治者被治者及び富者貧者の區別を知つて、之に服從せねばならぬ。若し支配者階級の權利を認めず、資本家階級の特權に反して、非理性的なる行爲に出る者があるならば、それは必然に惡人であるといふのである。更にゲーテがファウストに現はした理想に依れば、人間は初めさへ善ければ屹と終りも善くなる。若し終りが惡かつたなら、それは畢竟始めが惡かつたからだといふのだ。斯くの如く、根本に於てプラトーとその理想を一にせるゲーテが、ファウストの晩年を描くに及んで、眞にプラトーの夢想せるが如き哲學者にして支配者となした事は、甚だ興味ある事であるが、然もファウストはその命令を行ふに、惡魔メフキストー――善良階級、即ち支配者階級に對する反抗者の表象――の助力に俟たねばならなかつた。實にメフキストが、當時の支配者階級であつた中世の封建君主に對つて、極めて神聖であつた處の一切の事物を嘲笑する精神こそは、漸く勃興しかけて來た十八世紀に於ける中流階級の精神そのものだつたのである。

六

バヤアド・テーラアの云ふ處によれば、ゲーテは最初ファウストの第二部に於て、政治を論じやうと企てたのであつたが、後にそれをやめ財政と紙幣とを以て之に代へたのだと云ふ。惟ふにゲーテにして些しく政治史を研究したならば、最後に所謂善を亡ぼすものは惡であつて、是こそ社會的進化の法則なのだといふ事を直きに知つたに違ひない。然し乍ら、是はゲーテの善人論には根本的に反對するものなるが故に、彼は勿論此の『有名なる悲壯劇』に於て、遂に政治を論じなかつた。

ゲーテは何故にファウストをして、學僕ワグネル、兵士ヴァレンチン、若くはショベルを擔つて沼を乾す勞働者の役割の中に幸福を求めしめなかつたの乎。蓋し紳士閥の眼には彼等は人間で無くして、ファウストの如き眞の人間を『人生問題』に觸れさす爲にのみ存立して居るグレーチェンの如く、單に道具に過ぎないの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

だ。而してその所謂『人生問題』とは何である乎と云へば、單に從屬階級を從順に屈服せしめて置く手段に過ぎないので、彼等は問題その物よりももつと困難な方式を以て解決しやうとして居る。ファウストが即ちそれだ。彼は勞働階級に沼を與へ、その勞力の結果の生産物を與へずして、その大部分を獨占して是を外國貿易の爲に貯はへ、軍隊を作り艦隊を作つて掠奪階級たる自分達の外、凡ての者から彼等を保護し、餓死だけは辛と免かれる位の生産物の一部を呉れる代りに、彼等をして一層多く働らかせる。

ゲーテが壓制者と被壓制者の對立を知つて居たのは事實であるし、又、被壓制者に深い同情を寄せて居たのは、現にファウストの中に散見せる章句にも知らるゝ事である。然し乍ら、不幸にしてゲーテは他の紳士閥の文學者と等しく、社會的事實に關する無智識の爲めに、親しく佛蘭西革命、若くは更にそれより生じた大戰爭を目睹したが、竟に此の神秘的な社會現象の實相を捕捉し領會する事が出來なかつた。故に彼は歷史的進化の大事實を描かずして個人的事件を描き、社會的階級の對立より必然に生ずる鬪爭を寫すに超自然的なる善惡の鬪爭といふが如き理想を籍り來つたのだ。故に亦、半生を書齋の中に費して眞の人生社會を知らず、努力の空しかつた事に氣が付て、毒盃を仰がうとまで煩悶したファウスト（同上第一部三五五以下參照）はその最後に於ても同じく眞人生、實社會と懸け離れた、他人の勞力を掠奪して築き上げた財産と位置との上に座せる、初めと變らぬ孤獨のファウストであつた。その微笑も、その快樂も、その幸福も、絶望の時に強ひて作り出す慰さめに過ぎなかつた。

七

ジョーヂ・ウエツベル博士は、人間の精神的自由と發達、及びその肉慾の間の完全なる調和といふ事が、ファウスト劇第二部の主題でなければならなかつたのだが、ゲーテの老齡と理想の變化とは、遂に之が完全な解決に達しなかつたと云つて居る。然し乍ら、此の問題の解決の困難は、ゲーテの老年に存するのでは無く、實は社會的階級の存在に在るのだ。ゲーテは經濟的の慈善、階級的の慈善を以て、人間幸福の原則なりとし正義よりも高いものとして居る。社會的階級の廢せられざる限り、人は隣人から十を奪つて一を與ふる、慈善と稱する滑稽なる『悲壯劇』をくり返さればならぬ。而して又、若し個人と社會との間の調和にして成らざらんか、人間の精神的自由と發達、及びその肉慾の間の一致は到底望み難いものだ。蓋し、人間の精神的自由及び發達は　善惡の定義の據つて懸れる、社會生活に關せる問題を包含せるが故である。

要之、ゲーテがファウストを描かんとした動機は勿論立派なものだつたらうし、又、當時の狀態に在つては之は明らかに傑作に違ひあるまいが、然も吾々の見地から見る處によれば、此の事業は紳士閥の文學者に取つては余りに大き過ぎたのである。善惡は絶對的のものでも無ければ、此の私有財産制度が永遠のでも無い。惡魔『勞働階級』は他日これを廢弛して　異なれる意義の幸福、異なれる意義の善惡を敎ゆるに違ひないのだ。

（マアカス・ヒツチに據る）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

役者の藝術

ストリントベルグ
和氣律次郎譯

役者の藝術はあらゆる藝術中最も困難なものであると同時に最も容易なものである。然しそれはあらゆる美と同じやうに定義を下すことは殆んど不可能である。それは假扮の藝術ではない、なぜと云ふに偉大な役者は假扮しない、却つて彼は眞摯で正直で赤裸々である。假面や衣裝で何處までも自分を假裝するのは下等な喜劇役者のみである。それは模倣ではない、なぜと云ふに大根役者が屢々有名な人々を模倣することに惡魔的技能を有するに反し眞の藝術家には此才能が缺けてゐる。役者は全然詩人の媒介ではない、それには唯ある程度の範圍と制限とがある。

役者の藝術は美學上では獨立せる一藝術とは認められてゐない、從屬的のものとしてある。それは詩人のテキストがなくては存在することが出來ない。役者は詩人がなくてはどうすることも出來ないが、詩人は急場には役者がなくともどうでもすることが出來る。自分は未だ曾てギヨオテの「フアウスト」やシルレルの「ドン・カルロス」やシエクスピヤの「テムペスト」などの第二部の上場されたのを見たことがない、がそれを讀んでそれを見た、立派な脚本で實演すべからざるものがある、それ等は實演に堪へないのである、見物されるに堪へないのである。然し永存せんが爲めに演ぜられなければならぬと云ふやうな愚劣な脚本も澤山ある、それ等は役者の藝術を通じてのみ完全である、それに依つて高尚にせられるのである。

詩人は一般に役者に對して當然拂ふべき感謝を承認して居る、彼は常に謝意を表してゐる。一方又利口な役者は彼の詩人に對して謝意を表してゐる。自分は彼等は相互に負ふ所があるのであるから互に感謝して然るべきものであると思ふ。然し此無益な疑問が提出されないでゐたら彼等はモツト和合する事が出來るであらう。然し此疑問は當然失敗すべき脚本が名聲を博するに至つた場合屢々自惚れの強い馬鹿者又は大立物などによつて提出される。勿論こんな場合には云ふ迄もなく詩人が惡い、然しテキストが是非共必要だとすると彼等の役々にテキストを書いてゐる者は正しいとも云へる。

何人も日常生活で話したり歩いたり立つたり、身振をしたり顏を顰めたりする事を思へば、役者の藝術はあらゆる藝術中最もやさしい者のやうに見える。而し上述の場合彼は自分自身を演じ自分の芝居をして居る、之とは全く違つた者だと云ふ事が直ぐ分つて來る。若し彼がある役を研究して舞臺でそれを演ずるとなると、最もよく知つてゐる深く強い役が迚もやれないのに直ぐ氣が付く、却つて頗る單純な種類のものを樂に感ずる。ある者は先天的に演出の藝術を有してゐるが、他の者は此藝術を持つてゐない。然し初心者を判斷することは常に困難なことである、何故かと云ふに傾向を有して居つても直には現はれない者があるかも知れない、偉大な技倆を有する者で最初貧弱であつたのも少くない。されば管理者頭取等は青年の運命を手中に握つてゐるのであるから判斷に深く注意しなければならぬ。彼等は試驗し觀察して見なけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

ればならぬ、氣を永くして判定を將來に委すべきである。

眞に役者をつくるものは何であるか彼は如何なる資質をもたればならぬかは云ひ難いが、自分はその二三を述べて見たいと思ふ。

先づ第一に彼は集注力をもたねばならぬ、彼は彼の役に彼の思想を集注することが出來なければならぬ、少しなりとも他へ意を轉ぜしめるやうなことがあつてはならぬ。樂器を弄する者は彼の思想の赴むくがまゝに打捨てて置けば何うなるかを知つてゐる。さう云ふ時にはノオトが見えなくなる、指がブラつく、間違へたり中絶したりする、歌詞を知つてゐる時でもさうである。

第二の資格は想像力をもつことである、それはどう云ふ意味かと云ふと表情や境遇をまのあたり見るが如くに實現せしめてそれをある形に纒めることが出來るといふことである。自分は藝術家がある心神恍惚の境地に置かれて自らを忘れ遂には彼が演ぜんとするものになると信じてゐる。これは夢中行歩を聯想せしめる、が全然違つたものである。若し彼が此狀態にある時邪魔をするか又は我にかへらしめると、彼は止める――萬事休すである。かるが故に自分は常に舞臺稽古の際、ある一場を中途で遮ぎることに躊躇する。自分は役者が我にかへつた時如何に苦痛を感ずるかを目擊した、彼はねぼけてるやうに突立つて居る、再び熟睡する迄には即ち以前と同じ空氣や調子を見出す迄にはかなり時間がかかるのである。

役者の藝術の如く從屬的な藝術は外にない、彼は彼の藝術的仕事を孤立せしむることが出來ない、彼はそれを見せて『これは私のものだ』と云ふことが出來ない。例へば若し彼が相手の役者に共鳴を見出さない時には相手は彼のワキを勤めてゐないのである、彼は引き下されて飛んだシクジリを爲出來さぬとも限らぬ、彼が彼の最善を盡すとしても此影響に抗し兼ねる。役者は相互の勢力下にある、彼等は相手を爲負かして自分のみが前景へ現はれんが爲めに相手を隅の方へやつて了ひ度いと思つてる、非常な自惚家である。

されば若し演劇を効果あり卓越せしめんとするならば、劇場で最も大切なことは役者間の好意の精神である。役者は自ら他に服從すると同時に他を服從せしめなければならぬ、彼等は同列になつて共に働かねばならぬ、殊に彼等は和合して働かねばならぬ。價値ある功名心が凡ての人を、許されたる方法によつて自己を認めしめ賞讚を博し且當然受くべき報酬を獲んと勵ましてゐるこの事業界では以上の期待は特に過大であらう。

若しある役者が彼が演ぜんとする役及び場面を明確に想像したならば次に爲すべきことは彼の役を研究することである。それは先づ臺詞から始めるべきである、自分は臺詞は演劇藝術中最も重要なものであると考へる。調子が正しくば身振、動作、位置、姿勢等がこれに次ぐ、然しこれは演出の技能（想像力が强烈に發達してゐる時のことである。若又これを缺いてゐると手足は生命のないもののやうにダラリと垂れ、身体は死人の如くである、斯くて口を利く首が生命のない形体の上に現はれるのみである。初心の者は大抵こんな有樣である。臺詞―會話―は身体に這入つて必要な連結を生ぜしむる力がないのである。然し間違つた接觸を勝手にこしらへる、筋肉は飛んでもない時に働く、踠いたり動いたりする、指はちぢこまり足は休息又は適當な姿勢を見出すことが出來ないので絶えず新らしい位置を探してゐる。役者が神經過敏であるのみか見

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

物迄も不安ならしめる。されば役者には身体の健康を保つといふ事が中々大切である、それでこそ身体が思ひ通りになるのである。

役者は自分の役を支配すべきで役に支配されてはならぬ。換言すれば臺詞の爲めに心を奪はれたり醉はされたりしてはならぬ――自覺を失ふべからずである。彼は自己に注意を拂はなければならぬ、彼は臺詞の爲めに征服されてはならぬ、これは彼の役が自然に彼の記憶から出て來るやうになり、それが演出の技藝若くは想像の域に達した場合にのみ出來ることである。その時役は本當に彼の身中に根を下し自覺は其哨兵となる。記憶以上に深く這入つてゐない役は空しく響く。

役者は强健でなければならぬ、それでこそ相手の役者の影響に抗することが出來、彼等の調子の結果に捲き込まれないやうにすることが出來るのである。

役者はイリユウジヨニストである、斯くて彼は彼が眞の自己以外の何者かであるといふイリユウジヨンを與ふべきである。若し彼が强健で豊富な個人性を有してゐると、それは人心に徹底しプラスを創造して偉大な役者を作る。此プラスこそ發見するに至難にして且學ぶべからざるものである。それは想像、觀察、感情、趣味、支配の一般的誇張である。

いまもなほ青き顔して革命を獨り說くらん久しく會はず

手の白き勞働者こそ悲しけれ國禁の書を涙して讀めり

黃昏に、　哀果

A――夫人に

佐藤綠葉

先達ては大變失禮しました。

あれからもう一ケ月の上になりますね。あの時は隨分長い道を引つぱりまはしたので、もしや身体におさはりでもありはしないかと心配したが、ついそれなりに打ち過ぎて了ひました。

今かうしてあなたに手紙を書くといふ事も隨分久しぶりですね。あれは昨年の今頃でしたか、僕がまだ××社にゐた頃は、折々あなたに宛て丶手紙を書いたやうに記憶する。あの頃の心持を思ふと、極めて瞬間だが、僕自身にとつては一寸い丶氣持がします

僕は一体よその家に泊つた時は、容易に眠れない習慣を持つてゐます。殊に××社のやうな處へ泊つた時は、とても一晩中一睡を取る事も出來ません。で、折々何かの事件が出來て、もう赤電車なども疾くに車庫の中に引きあげて了つた時は、已むを得ず廣い汚い編輯室に泊る事もあるが、い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つもひとり徹夜して過ごすのを常としました。さういふ時あなたに手紙を書くのは僕には愉快だつた。何しろ仕事に疲れてゐるので、氣のきいた書物を讀む勇氣などはありません。その時あなたに手紙を書いたといふのは、實にさう大してあなたに興味があつたからではないかも知れませんが、しかもなほそれで愉快でした。

手紙を書いてゐると、何處からか鼠がチョロチョロと出てくる。それが平氣で椅子の上へでも卓子の上へでも昇つて、晝間使ひ殘した糊などを嘗めてゐる。ガタンと椅子の音をさせると、あはてゝ卓子の下へ駈けおりて隱れる。こんな事をしてゐる中に、間もなく朝がやつて來ます。

銀座の通りには一晩中人や車の通行の絶える事はないが、曉方の近づくに連れて、その人や車の通る音がはつきり兩側の街に響いて來ます。窓から眺めると、風が芽のほぐれたばかりの柳の葉を動かしてゐる。濠の水がどんよりと淀んで空の乳色を映してゐる。灰色の塵埃の薄く積つた街の屋根の瓦は、幾分か夜露にぬれて、ずつと眼の届く限りに甍を重ねてゐる。其の上を這ふやうにして曙がやつてくるのを見てゐると、何だか實に妙な心持になつて來ます。僕は子供の頃東京へ修學旅行に來て、朝早く起きて宿屋の二階から兩國の通りを眺めた事がある。丁度その時に似たやうな心持だつたと覺えてゐる。

それから××社を出る。出かけに矢張徹夜してゐる事務の處へ行つて切手を買つて、前夜書いて置いた手紙をポストへ放り込む。紅いポストはぐゐぐゐと廻轉してカタンと音を出す。あの音が今でも耳に殘つてゐます。

あの頃までは、あなたといふものが或る一定の濃度を持つて、僕の心の中に宿つてゐた。それがこの頃になつて見ると、次第に褪せて行つて、いつの間にか消えて了ひさうに思はれます。何だかあなたといふものが非常に見すぼらしく考へられる。丁度棗の實が干からびて行くやうに、だんだんあなたの姿が萎んで行く。この手紙は實は僕の心から消えて行くあなたの色を拭き去つて了はうと思つて書いたのです。

『私きつと四十までは若くつて見せる。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

あなたはいつだつたかこんな事を言つた事があります。その言葉をきいた時僕は實に吹き出したいやうな氣持がした。

成程あなたは大變に若く見える。そして美くしい事も事實だ。併し僕が偶然あなたのかゝり付けのP醫師の處へ行つた時、ふとあなたのプレスクリプシャンを見ると、それには年齢の欄に『二十三歳』と書いてあつた。あなたはその時二十九だつたぢやありませんか。實は僕はあなたがこんな事で嘘をいふ人だとは思つてゐませんでした。

有樂座に『マグダ』の興行された時、あなたは僕にそのスケッチを送つてくれましたね。それには何でもマグダとあの靜かな牧師の姿が書いてあつたと記憶する。あなたはあの牧師のやうに、僕が靜かにそして眞面目にあなたを思つてゐると考へたのでせう　僕は大變おかしかつたがそのまゝ何の返事も出さなかつた。

先達てあなたと一緒に歩いた時、あれは虎の門の邊だつたらうか、何でもあの邊であなたは大變謎めいた事を僕に仰有つた。

『それは少し遲すぎるか、又は少し早すぎるかどつちかだわ。』

この言葉をきいた時も僕は大變おかしかつた。何しろ僕があなたと知りあひになつたのはもう十年も前ぢやありませんか。それから今日までの間僕にそんな妙な心があつたならとつくに突き進んで居ります。僕はあなたを多少面白い女と思つてゐた。また多少話せる女と思つてゐた。それでずつと會はずにゐる間はその儘に過ぎたが、會ふと一寸惡戯をして見たい氣持が起る。それには都合のいゝ事には、僕のイタズラは、僕のこの眞面目らしい生れつきのためにイタズラらしく見えない事です。

僕の友達に直覺の鋭さを自慢してゐる男がひとりあります。此間も僕はその友達に一寸イタズラを致しました。事件を簡單に申あげると、その男はある劇場の大して有名でない女優と關係してゐるといふのです。本當かうそかよく分りません。處でその女優が蛇を好むといふので、蛇を頸か手かへ卷いてる寫眞が新聞に出たものです。例のイタズラ心が起つて來ました。そこでその寫眞を切り拔いて封筒に入れて、之をその男の處へ屆け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

置きました。併しそれをどうしても僕のした仕事とは思ひません。其の後友人が多數集つた時など先生見當違ひな友人に向つてお禮を云つてるといふ始末です。つまらぬ事だけれど、僕の顏はそれほど眞面目らしく見えるのです。

僕はあなたを思つてるやうな樣子をしたかも知れない。丁度あの『マグダ』の中の牧師のやうに靜かに十年もあなたを思つてるやうに見えたかも知れない。けれどもあなたと一緒に歩いてゐる時實は何を喋つたかさへ記憶してゐないのです。殊によると何か眞面目らしい事をあなたに話しながら、實は松本で一緒に紅茶を飲んだあの某かの金を『惜しい事をした、あれだけあれば丸善へ行けたのだが。』などゝ思つてゐたかも知れません。

十年も同じやうな態度をつゞけて來たといふ事は、實は僕にとつても多少厄介でした。併しもうその必要もありません。こんなにあなたの色が僕の胸から褪せて行つたのだから、この邊ですつかり下らぬ技巧をふるい落す事と致しませう。

『Hさんのやうに新聞にでも出されると大變だから…………』

と、あなたは僕が今新聞社にゐるといふので、其の後新たに出來たといふ經驗とかを僕に秘してゐられた。僕もイタズラ者だから、場合によつては他人の不幸を見て喜ばないとも限らない、がそこは十年交際の仲だから御心配は御無用です。十分勝手にその新らしい經驗とかをお樂しみなさい。

併しあなたがまだヴァイオリンの天才になりたいとか、油繪も書きたいとか、小説も人より上手になりたいとか云つてる、そんな道樂はおやめなさい。失禮だがあなたはそのいづれにもオリヂナリティーを持つてる方ではありません。もう今の時代は婦人がそんな夢を見てゐる時ではありません。

Shaw の "Mrs. Warren's Profession" の中に Vivie といふ女が出てくる。今の處僕はあんな女が好きです。しかし殘念ながらあなたはあんな賢い女ではありません。サヨウナラ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

夜の岡

荒畑寒村

時代

羅馬建國約七百八十年、アウグスタス帝の治世

場所

ヘロデ王の分封、猶太のガリラヤなるテベリヤ湖附近

人物

ペテロと云へるシモン　その弟アンデレ
ヤコブ　その弟ヨハネ
ピリポ　バルトロマイ
マタイ　トマス
アルパイの子ヤコブ　その弟ユダ
ゼロテと云へるシモン　イスカリオテのユダ
（以上イスラエルの十二支派を象れる革命黨の代表者）
ナザレのイエス
（彼等に依て選ばれたる首領）
先驅者と呼ばれたるヨハネの弟子二人

やゝ小高き岡の平らな中腹、背面右手の方にタボル山聳え、左手の方低くテベリヤ湖展け、その末は遠く平野を流れてヨルダンの河口に連なつて居る。永き夏の日も漸く暮れんとして、斑鳩の聲、遠く悲し氣に斷續する。

イエスは立ち、十二人の同志或は踞し、或は腹這ひになつて、緩やかな傾斜面を降つて、テベリヤ湖畔に歸つて行く群衆を見送つて居る。

ペテロ（靜かに立上つて岡の下を望む）『テベリヤの湖から上る霧が、ゲネサレの野を包んで、空はまだあんなに明るいのに、マグダラやダルマヌタには、もう夕闇の色が迫つた。――皆なもう見えなくなつたナ、いま坂を下つて行く白い姿は、女連れに違ひあるまい。マリアはマグダラに歸るのだから近いが、彼のヘロデの家令クーザの妻ヨハンナやスザンナ達は足弱な上、夜に入つては嘸ぞ困るだらう。』

マタイ（横はつた儘）『何しろ、對ふ岸のカペナウムまで歸るのだからなア。――然し、此のゲネサレの野に在る五つの村々で、同志にとつてはシャロンの野花、エンゲデの園のコペルの花華のやうな、彼の女連を泊めぬ家は一軒も無い。――よく斑鳩が鳴くなア、彼の鳥はいつも一番晩く塒に歸ると見える。』

トマス『日中の暑さと云つたら、若い木の葉も柔かい草の莖も、皆な熱と光を吐くかと思つたが

やつと涼しい風が吹き出したナ。――割れた柘榴の香ひがする――然し、如何したんだらう、俺は寂しい心もちがする。――俺達とパリサイの祭司や、サドカイの博士との烈しい論爭に、眼を火のやうに輝かして聞き入つて居た、あのガリラヤの漁夫や大工達――。そして波の引いた後の砂濱のやうに、蕭寂とした今の心もち――。俺の日頃の癖で、こういふ時はいつも、深い穴へでも落ち込むやうに寂しいのだ。』

シモン『ハヽヽ、その憂欝を癒すなア譯は無い。マグダラへ降つて往つて、マリアの處で葡萄から搾つた酒の一杯も飲んで、歸れ歸れシュラミの女よ、でも唄へばいゝんだ。――それよりも、今夜は一体何處へ泊るのだ。ゼベダイの家でか、レビの處まで往つてか。それ共また、舟の中へ寢て拂曉に風邪でもひくのか――。』

イエス『そんなに苦勞する事は無い、同志は何時でも俺達を待つて居るぢやないか――然し兎に角今夜はレビの家に泊る事としよう。アンデレと、アルバイ兄弟の三人だけ先へ行つて、レビに知らせて置いて呉れ。』

三人、起ち上り、岡を降つて去る。

シモン『俺達も暮れ切らない中に、ダルマヌタ迄なりと降りたいものだ。』

イエス『それよりも俺は、此の靜かに美しい景色に眺め飽く迄、此處に止まつて居たいのだ。タボルの山の巓は、永い雨期が終つて、斑鳩の聲が地に聞える頃の無花果のやうな色に染り、五つの村々を蔽ふ葡萄のやうに透徹つた霧の底には、湖が燻した銀のやうに光つて居る。その穩かな波の上に、やがてガリラヤの漁夫達の漁り火が、ソロモンの後宮に仕へた六十人の后　八十人の妃嬪の櫛に鏤められた、碧玉のやうに輝き出すだらう。そうしたら、レビの家に往つて、また人々に話をするのだ。――ナザレを出てからもう二年になる。その間、近くは此のガリラヤ海の圍りの諸邑、遠くはツロ、シドン、カイザリヤピリピまでも經廻つた。そして到る處で、ローマ政府の翼に隱れて、民の汗と膏の結晶を掠めて居る、パリサイやサドカイの祭司達から、憎まれ、追はれ、時には殺されやうと迄した。然し俺はまだ、經廻つた土地土地の美はしい景色をも、一刻として心靜かに眺めた事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は無かつた。――一日でも眞實に休んだ事は無かつた。――空の鳥には巣があり、野の狐には穴があるが、革命の盃を飲み干す迄、俺達は枕する處も無く漂泊ひ歩かねばなるまい。――ヨハネ、お前は何だつて、そんなに沈み切つて、考へ込んで居るのだ。』

ヨハネ（顔を上げ）『俺には先刻お前が話した、いろ／＼な事の意味が充分に飲み込めないのだ。――實を云ふと、畢竟、俺が無學だからには違ひないのだが――』

同志の群、『どう解らないのだ』『何が飲み込めないと云ふのだ』など、口々に叫び問ふ。

ヨハネ『俺には是が解らないのだ。――成る程百五十年程前に族長と祭司が聯合して、シモン・マツカビアスを世襲の王、及び祭司の長とした結果、イスラエルの十二支派の神も、異邦人の神と同じやうに、貴族富豪のみの神となつて了つたのは事實だ。そして亦、ローマの爲に亡ぼされた時猶太の民は族長と祭司とが舊い習慣を破つた天罰として、之を見たのも事實に違ひない。然し何故エホバは、猶太の族長と祭司との罪を罰するのにパロ王を起しネブカドネザル王を招いて、辜も無い人々まで殺すのだらう。何故萬軍の主エホバはその紅海の水を分け、ソドムに天火を降した大能の御手で、彼等だけを罰しないのだらう。――王の心はエホバの手の中に在りて、恰かも水の流れの如し、彼その聖旨の儘に之を導き給ふ、といふ箴言が眞ならば、何故最初から王に邪念を萠させるのだらう。神は富める者にも貧しき者にも、同じ神でなければならない筈だ。族長と祭司と聯合した時、人民の神で無くなるエホバは、寧ろ初めから族長だけの神、祭司だけの神だつたのじやあるまいか――』

イスカリオテのユダ（胸を抱いて起ち上り、恐ろし氣に身を慄はす）『何といふ恐ろしい誹瀆だ、ヨハネ、自分の口から出る語に氣を付けろ。――惡鬼が魅いたのか、サタンが靈魂に喰ひ入つて居るのじやないか、恐ろしい神罰を思はないのか――』

イエス『惡鬼に魅かれたのでなくて、永い眠りから、理性が眼を醒さうとして居るのだ。然しヨハネ、お前もまだ、全能なる人民以外、天地の間に神といふものゝ存在しない事を知らないのか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

——富の生產機關が、族長や祭司に私有されて居る限り、貧民勞働者は所有階級の奴隷に過ぎぬ、そして隣人を掠めて富を積む限り、兄弟として隣人を遇する事は出來ぬ。奴隷と主人と、何で同じ神を崇められやう。主人は必ず奴隷を虐ぐる神を創り、奴隷は屹度主人に反抗する神を作るのだ。——イスラエルの舊い歷史を考へて見ろ。今から一千九百年も昔、アブラハムは祭司の獨占制度と階級政治とから必然に生ずる、偶像崇拜の專制な支配を避ける爲に、イスラエルの人民を率ゐてカルデヤを去つた。そして彼等は、埃及に虜囚となつて居る間にも、その唯一の神を拜し、また永久的の農業を始めてから、十二支派の族長が王位に即かうとするのに反して、その唯一の神と、舊い種族的習慣とを守らうとした。ダビデが世襲的祭司の援けに由て、世襲的王位を確立してから、多くの豫言者は、從來その種族間に行はれて居た共產制度と、神の民主的崇拜とを維持しやうとする人民を後援として、祭司と王の頭上に火のやうな彈劾の雄辯を浴せた。——六百年程前に、猶太はネブカドネザルに亡ぼされ、人民はバビロンに運ばれて奴隷とされたが、アッシリアがペルシアに亡ぼされた爲め、俺達の祖先は再びエホバの神殿を建る事が出來た。然しマッカビアスが、族長と祭司の代表者として立つに及んで、エホバはまた彼等の神になつて了つた。——共產制が行はれて居る間は、エホバも種族の神だが、祭司と族長とが聯合して王を立て、そして治者と被治者との階級が現はれ、財產の私有制度が生じた時、エホバは權力階級の神となつて、人民を抑壓し凌虐する、傀儡として使はれるのだ。——ヨハネ、お前はまだ、人民の求めて居るメシアは、異邦人の政治的專制を除く許りでなく、全く族長と祭司の獨占に歸して居る土地や富を回收して、同じ種族の特別階級の經濟的抑壓から救ひ出す、革命なのに氣が付かないのか。』

ヨハネ『それじやイエス、俺達が宣傳して居る革命が成就した曉には、此の猶太の國を惠み支へる者は、神で無くなつて人民になると云ふのか。——ガリラヤの漁夫や、カペナウムの大工や、ヨルダンの外ふの諸邑の百姓がか——』

イエス『さうだ。だから俺は今日、勞働者は地の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

鹽、世の光だと云つた。また卑しき者は地を繼ぐべしと敎へたのだ。――豫言者サムエルが、エホバは荏弱者を塵の中より擧げ窮乏者を埃の中より昇せて王公の中に座せしめ、榮光の位を繼がせ給ふ、と云つたのは是だ。只だその昔の豫言者は、まだ迷信から脱れなかつた爲に、彼等が民の意志を代辯して居る事をば覺らず、只管神の聖旨と信じて叫んで居たゞけだ。』

ヨハネ『あゝ、――俺はまるで深い谷底へでも陷つたやうだ。――サタンが俺の眼の前から、日の光を叩き落して了つたやうに、暗い恐ろしさが靈魂を裂くやうだ。――だがまた、仄青い拂曉の光が、戸の隙間から洩れ入るやうな、便り無い明るさも感ずる。――あゝ眞實は何が正しくて何が誤りなのだか、俺には全く解らなくなつて了つた。』

イスカリオテのユダ（密かに同志の群を離れる）『恐ろしい罪だ。――神に對する叛逆だ。――惡鬼が魅いたのだ。――サタンが靈魂に喰ひ入つて居るのだ。』

イエス『サドカイの博士や、パリサイの祭司等が農民に地盤を有するエッセネ派に對する如く、俺達を迫害し、窘逐し、殺さうと迄するのは何故だ――神を崇める儀式の相違、會堂で讀む經文の差別。――そんな死後とか未來とかに關した事では無く、その有つて居る經濟上の權力を、失ふか保つかといふ現在の問題なのだ、階級と階級との闘爭なのだ。俺達が此の闘爭に加はり、そして最初の鬨の聲を揚げてから、逾越節はもう二度過ぎ去つた。イスラエルの十二支派を象つた革命黨が、十二人の代表者と、七十人の宣傳者とを立てゝ、此の猶太の諸邑に革命の福音を宣傳させる前に、ヨルダン流域の荒野に立つて、革命は近けり、人民よ起て！と絕叫した先驅者ヨハネの語のやうに、斧は今や木の根に置かれて居るのだ。――やがて革命の日が來る。――カルデヤ人が誇りとせるバビロンは昔し神に亡ぼされたるソドム、ゴモラの如くならん、此處に住む者永く絕え、世々に到る迄居る者無く、アラビヤ人も彼處に幕屋を張らず、牧人も彼處にはその群を臥さする事なく、只だ猛獸彼處に臥し、吼る者其家に充ち、駝鳥彼處に住み、牡山羊彼處に躍らん、豺狼その城の中に鳴き、野犬榮華の宮に叫ばんと、イザヤの豫言

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

した日が來る。――その時汝の民の人々の爲に立つる處の、大なる君ミカエル起あがらん、是れ艱難の時也、國ありてより以來その時に到る迄かゝる艱難ありし事勿るべしと、ダニエルの豫言した日は必ず來る。』

同志の群は、イエスの語に恍惚として聞き入つて居るが、イスカリオテのユダのみ獨り群を離れて、地に跪き、胸を打ちつゝ默禱に耽つて居る。――夜色漸く迫つて、燦然たる金星、テベリアの湖面に、美しくその影を落す。

イエス『若し、猶太の民がローマの專制政治と、パリサイ、サドカイ諸派の經濟的抑壓とを打ち倒して、再び共產制度に立ち歸つたなら、もう天の鳥、野の百合だも知らざる、空しき生活の煩ひに惱む事は無くなり、智識の開發にその全力を献げる事が出來るのだ。――勞働階級が現在の奴隷的境遇から遁れるには、固より大きな犧牲を拂はなければならぬ。然し、此の革命のいと狹き門を潛つてのみ、自由の天國に入る事が出來るのだ。――その時、荒野と濕ひ無き地とは樂しみ、沙漠は喜びて番紅の花の如く咲き輝くだらう。――正義をもて貧しき者を裁き、公平をもて國の中の卑しき者の爲に斷定をなし、その口の杖をもて國を打ち、その唇の息をもて惡人を殺すべし。――狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に伏し、犢、牡獅子、肥たる家畜共に居りて、小さき童子に導かれ――乳兒は毒蛇の洞に戲れ、乳離れの子は手を蝮の穴に入れんといふ、イザヤの豫言は初めて成就されるのだ。』

ピリポ『今も先驅者ヨハネの話が出たが、俺は如何かしてその日迄に、彼の死海の近くのマケラスに在る、ヘロデ王の城から救ひ出してやりたいと思ふ。』

バルトロマイ『實際だ、悲しいにつけ樂しいにつけ、何時も思ひ出すのはヨハネだ。彼の強い牡獅子の鬣のやうな心の男が、何で死毒のやうな牢獄の生活に堪へられやう。――外には日と夜とが交る交る廻り、斑鳩が鳴き、番紅花が咲いて居やう。いや、橄欖の山、エルサレムの宮、ヨルダンの川、ガリラヤの海は、もつと大きな變化を見たかも知れぬ。然し、此の暗く冷たい地底の獄舍では、晝は夜に等しく、時と年との別ちすら知る事が出來ぬ。同志よ、俺は何時まで待なければなら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ないのか――。俺達がガリラヤに止まつて居た時、そう云つて弟子をよこしたのは、無花果の葉も黄にすがれて、タボル山の巓から吹き降す風が、テベリヤの湖に寂しい波を皺立たせる頃だつた。――』

イエス『――終りまで迫害を忍ぶ者にして、初めて自由の國に入れるのだ。』

人々愁然として起ち、湖畔に導き下らんとする路に向ふ。まつ先に進んだヤコブ、何ものかを認むると共に、恐ろゝ如く急に身を引く。

ヤコブ『ヤツ、何だ、あれは――白い袍を着たものが二人、松明をかざして――』

人々互に見究めんとして、騒がしく罵り合ふ。――やがて、白き袍を纏つた青年二人、手にいま消したばかりで、白い煙が渦を巻いて立ち上る松明を携へ、素足で上つて來てイエスに挨拶する。

青年『先生、私共は先驅者ヨハ子の弟子でございます。』

人々、急に不安な思ひに囚はれ、或る凶兆を豫期するものゝ如く、默つて顔を見合せる。

イエス（青年の方に進み、そして語せはしく）『ヨハ子は殺されでもしたのか。』

青年『お察しの通りでございます。――先頃ヘロデ王が、マケロス城内の王宮で誕生の祝を催しました折、ヘロデヤの女のサロメがシリアの踊りを踊つて見せたので、ヘロデはその褒美として、何なり共取らせると申しました。すると、自分とヘロデとの結婚を、權勢を得る爲の賣淫と罵り、己れの奢侈の爲に民を强請る（はたる）のを咎めた爲め、とうから先生に怨みを有つて居たヘロデヤは、サロメを唆かして先生の首を望ませました――』

イエス『無道な蝮の裔め、ロトの妻が被むつた神の罰よりも、もつと恐ろしい人民の怒りを、やがてその上に加へてやるゾ。』

青年『――先生が斬首に處せられたといふ風説は、ぢきにペレアの地に擴がつたので、私共はマケロスへ參つて先生の遺骸を請ひ受け、新しい布に包んで、とある岡の岩穴に葬りました。――それは夕方の事でございましたが、岩穴の傍の老いた橄欖の幹は、入日に照されて玉蟲のやうに輝き高い梢には夥しい鳥が鳴き立てゝ居りました。――先生、私共は師の臨終に會ふ事さへ出來なかつたのでございます。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ヨハネの弟子、云ひ終つて泣く。――死の蔭の如き恐ろしい沈默、――やがて『犧牲』、『殉道』、『斬首』と云ふが如き語、低く彼等の間に囁き交される。――イエスのみ、獨り默然として立つて居る。

イエス（呟く如く）『自由の祭壇に供へられた最初の犧牲だ。――友よ、爾の尊い犧牲は、決して空には終るまい――。（急に聲高く）一粒の麥種が、若し地に墮ちて死なゝかつたら、良き實をば結ぶ事は出來ぬ。――あゝ曾て女の胎から出た、最も大なる者は死んだか。――先驅者よ――殉道者よ――、衆多の人を義に導ける者は、星の如くなりて永遠に至らんと云つた、ダニエルの豫言に適へる者よ――』

青　年『先生、これでお暇を申します。――先生の最後をお知らせする事が、私共の務めだつたのでございますから――』

マタイ『然し、これから何處へ往かうと云ふのだ――。こんなに暗くもなつたのに――』

青　年『先生が主義の爲に命をお隕しになりました。ヨルダンの外ふのペレアに歸つて、先生の殘された事業を成し遂げたいと存じます。――其處には同志も待つて居ります、窮乏のドン底に陷つて居る勞働者は、鍬や鋤を打ち碎いて劍を鑄、そしてメシアを待つやうに革命を待ち望んで居ります。――では、お暇いたします。』

ヨハネの弟子、深く禮をなしてもとの道に歸つて行く。人々、岡を降つて闇の中に消え行く、二個の白き姿を見送る。

イエス『西の空に雲が起れば、直に雨の降る事を知り、南から風が吹く時は、暑くなる事を悟る者が、盜人の夜ひそかに襲ふ如く、革命の起るのを何故悟れないのか。天地の色象を別つ事を知つて何故世の事象を別ち得ないのか。――見ろ、ヨハネが地に投げ入れた火は、既に燃え上らんとして居るのだ。今から後、父は子に、女は母に、嫁は姑に、兄は弟に敵對し、抗爭するだらう。――さあ、愈々起つ時が來た、衣を賣つて劍を買ふ時が來たのだゾ。今年の秋と冬とはエリコ、ベテバゲ、ベタニヤの諸邑に過して、人民を團結させせなければならぬ。そして翌春の逾越節の折、太守スクタリの治世に、埃及を出た三萬の猶太軍のやうに、橄欖山に據つてエルサレムを襲ふのだ――。』

ペテロ『だがイエス、ヨルダンの外ふに入つては

敵の勢が強いのと比例して、味方の力が弱いのだぜ。――何も功を急ぐ事は無いじやないか、俺はもつと、安全な策を採つた方がいゝと思ふ。』

イエス『ペテロ、お前は世と人との事を思はずに自分の事のみ考へて居るのだ。――自由の最初の犠牲となつた、ヨハネ　事を想つて見ろ。また、ペレアに起らうとして居る、革命の軍の事を想つて見ろ。俺は實に一日も、一刻も、こうしてグズグズしては居られないのだ。――エルサレムよ、一切の無道と罪惡との都よ、俺は汝の邪しまな組織を毀つて、三日の中に新しい制度を建てゝやるゾ――。』

イエス、大聲に呼はり乍ら岡を馳下る。同志の群、イスカリオテのユダの獨り殘つて居るに氣付かず、イエスに隨つて岡を下る。――暴風の後のやうな、洞然たる寂寞と悲哀　。ユダ、凝然として闇を睨みながら立つ。

ユダ（低く、途切れ途切れに、呟く如く）『――恐ろしい事だ、――神の殿のエルサレムで、――血と焔の革命を起さうとする。――恐ろしい誹瀆の罪だ。――（やがて、電に打たれた如く急に身を慄はし、大聲に叫んで地に倒れる）オ、、神よ――――』

―完―

「空中の悲劇」と「林檎園」

寒村

■二十七日の夜、牛込高等演藝舘で開かれた創作試演會を觀に往つて、最も深い興味を感じたものは、仲木貞一氏作『空中の悲劇』一幕と、秋田雨雀氏作『林檎園』二幕とであつた。

■『空中の悲劇』の舞臺上の効果は、前半が甚だ緊縮して居たにも拘はらず、後半は殆んど無茶苦茶であつた。暴風に翼を折られて落下する、夫の乘つた飛行機を窓から眺むるアレキサンドラの煩悶は、些し木下に荷が勝ち過ぎるやうであつた。高山のマシウヰツチ、三好のペトロウヰツチ、共に如何　もテロリストらしい顔付は得心だが、只だマシウヰツチが、飛行の際には地ーの光景に見恍れて思想感情全く變化し、爲に同乘せる大使暗殺の計劃さへも遂げなかつたといふのは、作者がテロリストの思想感情を了解し得なかつた結果であつて、いくら下界を離れたからつて、人間の意志精神がそう變化しやうとは思はれぬ。故に僕には、如何してもマシウヰツチが、テロリストよりも藝術家に見へて仕樣が無かつた。

■『林檎園』は極めてアーチスチツクに、非戰論を仄めかしたものと云へやう。一言の出征せる子の無事を希ふ事なく、半句の戰爭の慘害の恐ろべきを云ふ事なく、只だ最後に、酒を被むつて僅かに、戰爭を憎み子を氣遣ふ心を扮らはして居た父が、卒然として立ち上り、慄へる聲に『戻　、死んで歸つて來い。』と云ふのに、言外の意味を含ませたものである。此の幕では俳優が皆よかつたが脚本の思想の表現が余りに遠慮に過ぎた爲め、却つて舞臺上のエフェクトを減殺された感がある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

惑星旅行（二）

ラフワロヰッチ作
安成貞雄譯

此の國の學者の一人が校訂した英語辭書の中で、彼が其意味を理解し得ない若干の言葉を示したが、僕はそれを說明するにひどく閉口した。結婚とか、法律とか、政府とか、美とか云ふ觀念は、彼の頭に何の反響をも起さない、起しても極めて漠として居る。神、物質、憤怒、性格、道義、能辯の語は同じく何等の感銘をも傳へない。善と惡とは等しく一の神秘である。僕は後者を例解する爲めに、彼を擲り、前者を例解する爲めに、彼の手（彼は三本の指しかない）を撫でた。けれども、彼は僕の打擊と愛撫とを返したゞけで、依然理解しない。僕が言つた英語は、彼によつて忠實に反覆された、けれども、僕の推理は隨分論理的だと云ふので通つて居るにも拘らず、彼は僕が丁度無茶なヨタを繰り返してゞも居る樣に、僕の說明を嘲笑するだけだ。御互に思想を讀み合ふので、彼等は、政治家の必要を感じない。此の時、僕は腹が減つて死にそうになつたので、食べ度いと云ふ事を表示しやうと試みた。僕の通譯は、點頭いて大きさ榛の實ほどの小球が二三百ばかりはついて居る美事に彫刻した木箱を渡して吳れた。僕が狐疑したのを見て、通譯は一つ摘んで嚥み込んだ。僕もそれに倣つた、すると、直ちに非常な力と精力が總身に滿つるを覺えた。彼等は是れが此の惑星上に存する唯一の營養品であると云ふ事を說いて聞かせた。此の丸藥は、各人が果たすべき仕事の分量に應じてそれ〲分與されるのである。僕はその時彼等は一人として齒がなく、其の胃囊はチョコレート一と塊食べても不消化に陷るに相違ないだらうと思はれる程小さいのを發見した。

けれども、僕の驚愕は是れに止まらなかつた。僕が女性の代表者が一人も見えず、子供が殆んど居ないのに多少驚いた樣子を示すと、案內者は、此の惑星では婦人が稀少であると云ふ事を說き明かした。從つて、出產を制限されて居る子供も、數が少ないのだ。僕を取り卷いて居るもの殆んど全部と、僕を案內した二人とは、中性者——性の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

別のない――であつた。みんなかなり長生きをして居る、と云ふのは、僕の計算が正しいとすれば、惑星の一年は約二千日で、彼等の壽命は平均百二十年位であるからだ。(平均と云つたのは、彼は自ら死期を撰むからである。)

　彼等は夜中睡眠し、晝一杯あるいて、何か新發見を目ざして精神的に働く。彼等は、見た所、肉体的努力を要せずに、意志の強い努力によつて、甲地から乙地へ、欲するまゝに動く事が出來るが、智識的勞働に一番力を盡す中性者が、特に此の特權を持て居る。僕は此の連中の住家を觀たいと思つたが、彼等はさうさせたがらなかつた。彼等は大概青天井の下で暮して居るので、醫者を要しない。そして存分生きたと思ふ時毒を呑む。商業は營養丸藥の交易に止まつて居るらしい。僕は僅に其屋根を見たゞけだが、其住家には家財道具が澤山は納まらない。彼等は讀む事が少ない、本と云つては僅少な科學上の公式を持つて居るだけである。歸るべき時間が迫つた時、僕は金ぴかりの緣褞袍を着た人間が、殆んど天樂かと思はれる歌をうたひながら、長い列を作つて通るのを見た。

『えらいもんだね』僕は案内者に尋ねた『何んだらう是れは？』

『今日はねえ』彼は答へた『遠心的瓦斯の脹らんだ囊がなくても空中を旅行する方法を發見した賢人の年次紀念祝典なんだ。其の發見は、賢人が亡くなつてから完修して、今日では此の上もなく完備して居るのだが、吾々は十世紀以前に、化學的に最初の中性者を創造した人として、十分に其紀念を崇重するんだ。』

　『それぢや、あなた方にはもう何んにも勉強するものが殘つて居ないんですね？』

『どうして〳〵。澤山ある、何の方面にも解決すべき問題がある。例へば、吾々は、一番近い惑星の軌道を變更しやうとして居る。こいつは或る點を通過する時、其臭氣で吾々を惱ますもんだからね。それからまた、財産と云ふ問題に就いても、まだ大分議論がある、終局の解決を任された委員會の意見が一致する迄には非常な難關がある。是迄の習慣では、成功しなければ黑い死藥を呑む事になつて居る。すると他の者が局に當るのだ。』

　『だつてあなたがたは他の經濟組織を知らなか

つたんですか？富豪階級、主人、神などが無かつたんですか？』

『ずつと大昔にはあつたさ、科學がほんの子供の時分には、吾々は神性があつて不可思議な外界の主人を崇敬して、これを讃め稱へるのが吾々の務めだと考へて居たのだ。けれどもこれァ二十世紀も前だ。財産の事だつて其の通りだ。各人が死ねば、土地はみんなの物になる、(土地は全体に屬するから)けれども、若しその人が學者だと、吾々は其紀念を保存する。何人も品物を蓄積するを得ない。風船や、汽車の時代には、吾々は政府が管理に當り、公共所有主たるべしと定めて居つた。科學の進歩がすべて是れを一變して了つた。こゝにはもう博物館の外には風船がない。』

『それぢやァ隨分なまけ者が居るわけですね。』と僕は叫んだ。

『さうとも。働くのは科學者の額を持つて生れた者だけだ。他の者は勝手さ、生きて居やうと考へやうと、遊ばうと旅行しやうと、ね。稀には出張をする事があるが、大抵は何にもしやしない。一時間働けば、愉快な興奮的な生命の灰色丸藥を何千となく買るんだ。死丸藥の方は呉れてやるんだ。』

『すると、家族生活――家庭はもう無いんですね父親も母親も子供も――みんな別居ですか？』

『此の星には男性が五六人しか居やしない、子供などたまにしか父に會はないんだ。僕は全く父に會はないよ。』

『それで貴君は？』僕はも一人、僕を案内して呉れて、丁度僕等の立つて居る所へ飛んで歸つて來たのへ聞いた。『貴君は御母さんが有ますか？』

『ない。僕は創造者があるばかりだ、化學者のホワッツヒズネームが。(Whatshisname)』

二人は、こんな勤めに慣れて居ないので、話しくたびれた樣子である、僕の方も亦もう此の上理解する事が不可能になつた。狂亂がずん〳〵掩ひかぶさつて來る氣がする。僕は歸り度いと云つた、そして數分間で、間歇的狂氣の惑星、懷しい地球の上の、ポケットの物を置てある所へ歸つて來た。

さもあらばあれ、僕はも一度不思議な惑星を見たいと思ふ。僕の案内者は又來る筈に約束してある。

（完）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人と超人

バァナード・ショウ作
堺利彦譯

第一幕（つゞき）

アン　又あなたはそんな冗談を云ふわ。よして頂戴な。あなた何うしてそんなに私をいぢめる樣な事ばかり仰るの?。私は一生懸命あなたのお氣に入る樣にしてるわ。ネエあなた、そう云つたつて可いでせう、あなたは私の後見人になつたのだもの。私つらいわ・あなたが仲よくして吳れなくちや。

タナア（益に愁然としてスペンサーの肖像を眺めたと同じ樣に、愁然としてアンを見守りながら）僕の情を引くには、あなたの方でそんなに賴む必要は無い。あゝ〳〵、道德上の判斷なんと云ふ者は實に力の無いものだ。僕の目には、あなたは丸で良心が無い樣に見える。丸で僞善ばかりの樣に見える。あなたには良心と僞善との區別は無い。所が、それで居てあなたに矢張り人を惱ます力がある。兎にかく僕は何時でもあなたの命を奉ずる。あなたを失へば矢張り僕は失望する。

アン（靜かに其腕をタナアの腕に掛けて室内を步きながら）だつてあなた、そりや當前ぢや無くて?。小供の時からのお友達なんだもの。あなた覺えて居るでせう、あのそら——

タナア（忽ちアンの手を放して）モウ云はないでも可い。僕はミンナ覺えて居るから。

アン　そりやねえ、隨分お互に馬鹿も云つたわ。だけど——

タナア　よしてお吳れよ、アン。僕ア今ぢやモウそんな小供ぢや無い。僕がモウ小供で無いのは、僕がまだ八十九十のヨボ〳〵爺さんで無いのと同じ事だ。過ぎた事はモウ僕に忘れさせてお吳れよ。

アン　でも其頃は面白かつたわねえ。（アンは又タナアの腕に寄らうとする。）

タナア　マアそこに座つて行儀よくなさい。（と、机の側の椅子にアンを腰かけさせる。）そりやあなたの爲にや面白かつたらうさ。あなたは好い子に成りすまして居たんだもの。そして評判のいたづらツ子よりもモツト愉快な事をしたんだもの。あなたが外の娘達をいぢめた遣方は、僕にはよく分つてる。ツマリ其のお上品で以て彼等を壓したんだ。然しそれはマアいゝとして、あなた男の好い子を知つてるか。

アン　知つてますとも。男の子は皆んな折々馬鹿をするけど、テビドは何時でも本當に好い子だつたわ。

タナア（頗る感心して）そうだ、全くだ。何故か知らないが、テピーだけにはあなたが誘惑を試みた事が無い。

アン　マア！誘惑だつて！。

タナア　そうさ、誘惑さ、我が親愛なるメフイスト孃。あなたは男の子が何をするだらうかと、それに對して飽く事を知らざる好奇心を持つて居た。そして其子の腹の中を見透かして、底の祕密を掘りだす事に恐ろしく巧であつた。

アン　馬鹿おつしやいよ！。あなたが色んな惡戲をして、さん〴〵馬鹿な眞似をやつてさ、それを私の處に來ちや、皆んなスッ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

カリ話して行つたんぢやありませんか。それに底の秘密だなんて。小供の秘密も大人の秘密も同んなじものだわ。あなた知つてるでせう。

タナア（意地ばりて）　いゝや知らん。ぢや秘密とは何です。

アン　分つてるぢや無いの。秘密ッたら誰にでも話す事だわ。

タナア　所が、僕は誰にも話さない事をあなたに話した。あなたは私を嫌して、二人の間に秘密を持つまいと約定させた。二人の間には何人でも互に打明けて話さうと云ふ事になつた。そして僕は、あなたが何んにも話さなかつたと云ふ事に氣が付かなかつた。

アン　だつてあなたは私の事を聞きたがらなかつたんだもの。そして自分の事ばかり話したがつて居たんだもの。

タナア　如何にも、全く其通り。然しそういふ弱點を知つてさ、それを弄んで自分の好奇心を滿足させたとすれば、あなたはマア何といふ惡魔ッ子だつたらう！。僕はあなたを面白がらせて、あなたに自慢がしたかつた。それで何かあなたに話をする種を拵へようと思つて、其爲ばかりに色んな惡戲をしたものだつた。嫌でもない小供と喧嘩をして見たり、本當の事を云つていゝ所に態と嘘を云つて見たり、欲しくも無い物を盗んで見たり、詰らない娘等にキスして見たり。それが皆んなエラがりの結果で、本氣で仕た事で無いのだからッマリ嘘だつた。

アン　でも私、あなたのこと告口した事ないわ。

タナア　それは無い。けれども、僕がそんな事をするのを止めさせようと思つたら、告口もした筈なんだが、あなたは矢張り僕にそれをやらせたかつたのだ。

アン（少し躍起となりて）　そんな事があるもんですか。嘘だわ。私があなたにそんな馬鹿らしい、氣の利かない、亂暴な、無茶な、下等な事をさせたがつたなんて。私はいつもコウ思つて居たんだわ、あなたの惡戲も何時かキット本當の勇ましい行ひになつたらうと。（こゝで稍落ちつきて）アラ、あんまりムキになつて御免なさいよ。だけど、本當にあなたの仕事は丸で私の仕て欲しかつた事とは違つてたんだもの。私おり〳〵あんまりだと思つてハラ〳〵したわ。けれども、私そんなこと告口してあなたを人に叱らせたり仕たく無かつたんだもの。それにあなたはまだホンの小供だつたし、今に直るだらうと思つたんだもの。それが惡かつたかも知れないけど。

タナア（皮肉げに）　御心配には及びません。僕があなたに話した手柄話の、二十の中の十九までは、全くの嘘だつた。あなたが本當の話を喜ばないと云ふ事は、僕にも直ぐに氣が付いて來たんだから。

アン　そりや私だつて、眞逆そんな事がと思つた事もあるわ。だけど——

タナア　だけど隨分あの怪しからん事の中にも本當の事があつたぢや無いかと云ふのでせう。

アン（さもいとしげに云ふ、タナアは大きに恐れる体）　何も私それであなたを責めるんぢや無いけど、先の人達を私が知つて居たものだから、それで私色々聞いてるわ。

タナア　然し其の本當の事にしてもだ、話するにや多少潤色がしてあつた。感じの強い小供が大なる屈辱と思ふ事も、面の皮の厚い世間の大人共に取つては、好い慰みであるかも知れないが、

其の小供自身に取つては、餘りに辛く、餘りに恥かしくて、到底白狀が出來やしない。ツマり一生懸命否認するより外は無い事になる。尤も少々色を附けて話した位が、丁度僕の爲に善かつたのだらうさ。現に僕が在の儘をあなたに話した時、あなたはそれを言ひつけると云つて僕を威かしたぢや無いか。

アン　あら、そんなこと無いわ。一度だつてありやしない。

タナア　ありましたよ。あなたはラシエル・ローズトリーと云つた、目の黒い娘を覺えて居るか。(アンは覺えずチヨツト眉を寄せる。)僕があの子と仲好になつて、或晩花園で出會をして、互に手を取り合つたりして非常に不愉快な散歩をして、別れしなにキツスなんぞして、それでヒドク小說的(ロマンチツク)な氣で居た事がある。若しかあの戀が續かうものなら、僕は死ぬほど閉口したに相違ないが、幸ひに續かなかつた。と云ふのは、僕が其事をあなたに話したのをラシエルが知つて、それで直ぐに僕と別れて了つた。ラシエルはどうしてそれを知つたのだらう。無論あなたからさ。あなたがラシエルの處に行つて、彼れの罪を頭ごなしに責めつけて、それを人に話すと威かしつけて、さんざ怖がらせて了つたんだ。

アン　それが彼子の爲にも善かつたぢや無くて?、彼子の不品行を止めるのは私の義務だつたもの。彼子は今でも其事で私に感謝してるわ。

タナア　どうだか。

アン　して居るべきだと私思ふわ。

タナア　ぢや僕の不品行を止めるのはあなたの義務ぢや無かつたんだね。

アン　矢張りそれであなたの不品行をも止めたぢや無くて?。

タナア　そうですかねえ。成程あなたはそれで僕があなたに手柄話をする事を止めたには相違ないが、それで僕の悪戯がやんだと何うして思ふ。

アン　ぢやあなた、其後も矢張り外の娘達と同じ樣な事をしたと云ふの?。

タアナ　いや、そんな馬鹿な眞似はもうラシエルの事で澤山になつた。

アン　(得心が行かぬといふ体にて)　それぢや何故あなたは、それきり私に何も打明けなくなつて、丸で他人の樣になつて了つたの?。

タナア　(意味ありげに)　丁度其時から、僕にはモツあなたに分けられぬ、僕一人でしまつて置きたい物が出來たんだ。

アン　そんなにあなたの惜しがるものを、私が分けて呉れと云やしなかつたでせうに。

タナア　それはねアン、菓子の箱や何んぞぢやありませんでしたよ。あなたに云はせれば、吃度僕の物だと云ふ事を許さない或物だつた。

アン　(不思議そうに)　ぢや何なの?。

タナア　僕の精神。

アン　およしなさいよ、あなた。そんな冗談ばかり云つてさ。

タナア　いや、極めて眞面目な事だ。丁度其時、あなたにも精神が出來かけて居たと云ふ事は、恐らくあなたには氣が付かなかつたらうか、それは事實だ。あなたがラシエルを責めて、其行ひを正すの義務があると、其時急に思ひだしたのには意味がある。其時まで、あなたは隨分好い子を賣物にしては居たが、まだ他人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に對して義務があるなど、云ひは仕なかつた。所が僕も亦其時から義務の感を生じた。其時までの僕は、丸で小供盗賊で、庭鷄小屋を襲ふ狐ほどの良心も無かつた。然るに其時以後、僕は遠慮を仕はじめた、義務を感じはじめた。誠とか、正直とか云ふ事が、大人の口から出る厭な誡め言葉でなくて、我が心中の力ある主義となつた。

アン（物靜かに） それは本當にそうだわれえ。あなたは男になりかけたし、私は女になりかけたんでせう。

タナア もつとそれより以上の者に二人が成りかけて居たと、あなたは思はないか。男になりかける事と、女になりかける事とを、世間で人が何と云つてる。あなたも知つてるだらう、即ち戀の初だ。然し僕にはそれよりもズツト前から戀が初まつて居た。僕の覺えて居る一番初の夢や空想や馬鹿ふざけの中に既に戀の分子が加はつて居た。……それは或は、僕のと云ふよりは、寧ろあなたと二人の（勿論、其時には互に氣が付かずに居たのだけれど）二人の覺えて居る空想や馬鹿ふざけと云つた方がいゝかも知れない。それで僕に生じた變化と云ふのは、戀では無くて、道德慾の發生であつた。そして僕は僕の經驗に依つて、道德慾が唯一の眞實な慾情であることを斷言する。

アン そりや何の慾情だつて皆んな道德的で無くちやならないわ、あなた。

タナア なくちやならない！。凡そ慾情を制するに、それよりも一層強い慾情を以てするの外に、なくちやならないなど、いふ力があるとあなたは思ふか。

アン そりやあなた分り切つてるぢや無くて。道德心で慾情を制するのだわ。

タナア 道德心！。それも慾情ぢや無いか。慾情と浮かれ氣とは皆んな惡魔の有だとあなたは云ふのか。若し道德心が慾情で無いならば、慾情中の最も強大な者で無いならば、外の慾情が皆んな寄つて、旋風の前の木の葉の樣に、道德心を吹き拂つて了ふだらうぢや無いか。小供が大人になるといふのは、即ち此の道德慾が發生するんだ。

アン まだ其外に慾情があるわ、あなた。大變に強い慾情が。

タナア 外の慾情は皆んな前から僕に在つたが、それは目的の無い、氣の拔けた慾情で、ホンの小供らしい貪慾か殘忍か、好奇心か氣まぐれか、習慣か迷信かに過ぎない、大人の心から見れば隨分滑稽な變挺な者であつた。然るにそれが頓に新たなる焰となつて輝きだすのは、決して其の慾情自身の光に依るのではなく、別に道德慾が曙の光を示すからである。即ち此の道德慾が彼等を威嚴ある者と爲し、彼等に自覺と意義とを附與し、肉慾の群集を化して主義あり目的ある軍隊に組織するのである。僕の精神は即ち此の道德慾の中から生れたんだ。

アン そりや私も、あなたが大變眞面目になつた事に氣が付いて居たわ。それ迄のあなたは恐ろしい破壞的な小供でしたものね。

タナア 何が破壞的なものか。只ヤンチヤだつたのさ。

アン だつて、隨分破壞的だつたぢや無くて?。木太刀で以て小松の新芽をメチヤ／＼に切つたり、石弓で黃瓜をメチヤ／＼に叩き壞したり、共同地の野原に火を附けたりしたぢや無いの。そしてテビーが幾らあなたを止めても肯かないんで、怖がつて逃げだしたものだから、巡査に間違へられて捕まつた事があつたわね

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

え。

タナア　馬鹿を云つてらア！。そんな事は話にも何にもなりやしない。(譯者云、此ところ一句不明、省略)あなたにはまだ到底想像のつかない事があるんだ。僕は今ぢや其頃よりか十層倍破壞的になつてる。僕の道德慾は僕の破壞性を捕へて、道德的方面に向けかへた。それで僕は改革者になつた。改革者は總て偶像破壞者である。僕はモウ水瓜を壞したり、藪を燒いたり仕やしない。今の僕は信仰を破壞し、偶像を粉碎するんだ。

アン　(こんな話が少し厭になつて)　私は女だから破壞なんど厭だわ、破壞つて只壞すばかりだもの。

タナア　そうさ、だから破壞が好いんだ。建設なんて云ふ者は、世間のオセツカイな奴が拵へた制度で以て此の地上に網を張るんだ。破壞は即ちそれを取去つて自由の境地を作つて吳れるんだ。

アン　そんなこと餘計なお世話だわ。あなたに贊成する女なんぞ一人もありやしないわ。

タナア　それはあなたが、建設と破壞といふ事を、創造と殺戮といふ事とゴツチヤにしてるからさ。其の二つは丸で違ふ。僕は創造を好み、殺戮を憎む。本統にソウだよ、僕は創造を好む。木に於ても花に於いても、鳥に於いても獸に於いても、或はあなたの身に於いても。(アンの顏に、頓に注意と喜びとの光が添ひ、今まで厭々そうな困つた樣子が無くなる。)あなたが僕に綱をつけて引張りよせて、今日までも其の痕跡を僕の上に殘して居るのは、即ち其の創造的本能に依るのだ。本統にソウですよ、僕とあなたとの間に在つた、あの昔の小供らしい約束は、即ち無意識の戀の約束だつたのだ。

アン　まあ！。

タナア　いや驚くには及ばん。

アン　驚いてやしないわ。

タナア　(少し冷かす樣に)　だつて驚くのが當然ぢや無いか。それで無くちやあなたの主義はどうなる。

アン　いやですよジヤツク。あなた本氣なの？冗談なの？。

タナア　何がさ。道德慾の事？。

アン　いゝえさ、モ一つの事さ。(少しドギマギして)　私知らないわ。あなたの云ふこと眞に受けられやしない。

タナア　僕の云ふ事を眞に受けなくてどうする。僕はあなたの後見人だ。あなたを敎育するのは僕の義務だ。

アン　ぢや戀の約束はモウ無くなつて了つたの？。あなた私が厭になつたんだわれえ。

タナア　そうぢや無い。けれども、道德慾が生じた爲に我々の小供らしい關係が不可能になつた。僕の心中に新しき我といふ氣分が生じた。――

アン　あなたはそれからモウ小供扱される事を厭がつてたわれえ。馬鹿だわ、本統に。

タナア　そりやソウさ。小供扱されるのは即ち元の立場で扱はれるんだもの。僕は其時モウちやんと新しい人に成つて居たんだ。だから元の僕を知つて居た者は皆んな僕を笑つた。只本統に譯の分つて居たのは仕立屋ばかりだ。仕立屋は僕を見るたんびに新しく尺を取つたが、外の人は皆んな古い寸法で以つて僕の身に合ふものと思つて居た。

アン　あなたは其時から恐ろしく自分の事を氣にしだしたわれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

え。

タナア　あなたがね、天に登つて御覽よ。最初の一年かそこらは、自分に翼の出來た事が恐ろしく氣になるから。そしてそこで親類の人にでも會つて、矢張り元の人間の扱ひを受けて御覽、迚も堪るものぢや無い。其時あなたはキツト、天使としてばかりあなたを知つて居る仲間の處に行かうとするに違ひない。

アン　それぢや、あなたはツマリ虚榮心で私達から離れたんだわね。

タナア　さうさ、マアその虚榮心さ。

アン　それなら何もワタシからは離れなくても善かつたのにねえ。

タナア　いや、特にあなたから離れる必要があつた。誰よりも一番あなたが僕の解放の妨げになつた。

アン（熱心に）　あら、あんな悪い事を云ふわ。私あなたの爲にはどんな事でもしたんだわ。

タナア　僕を逃がすより外の事なら、どんな事でもねえ。其時分からあなたはモウ、男に義務をかぶせ懸るといふ女の手管を本能的に知つて居て、さも弱々しげに男の足元に身を投げて、それでトウ〳〵男にあやまらせて了ふといふ術を心得て居た。僕の知つてる男に、女房から逃れる事を畢生の目的として居る奴があつた。所が其の女房は、若しか男が自分を棄てたら、直ぐに汽車のレールに飛込んで見せると云つて、其の威かしで男を引張つて居た。女といふ者は皆んなそれをやつてるんだ。我々男子が女の氣に入らない處に行かうとしても、それを止る法律は世間に無い。けれども、若し男子が一足でも踏み出さうとすると、女の胸は直ぐに男子の足元に轉がつて居る。我々男子が今や外に出かけようとすると、女の体は何時でも其車の輪の下に投げられて居る。僕は斷じてそんな風に女の奴隷にはならない。

アン　だつてあなた、幾らあなただつて一生涯少しも人の事を考へずには居られないでせう。

タナア　左樣。然し其の「人」とはどの人だらう。一体、人の事を考へると云ふのが、イヤ寧ろ、考へる考へると云つて人の事を恐れるのが、即ち我々を意久地の無い奴隷にする所以であるのだ。假に僕があなたの事を考へるとすれば、即ちあなたの意志を以て僕の意志に代へるのだ。そして若しあなたの意志が僕のよりも下等であつたらドウなるだらう。女は男よりも智識が多いか少いか、あの選擧人の有象無象は政治家よりも智識が多いか少いか、勿論どちらも少い。公人は皆選擧人の意志を迎へ、私人は皆女房の意志を迎へるとなつたら、此の世の中はどうなると思ふ。今日の教會と國家とは何を意味して居るか。婦人と納税者とばかりでは無いか。

アン（一向平氣で）　あなたは大變善く政治の事を知つてるわね。あなたが今に議員になつたら屹度いゝでせう。（タナアは張り切つた風船玉に針を刺した樣にへこんで了ふ。）だけど私の感化をそんなに悪い者の樣に云ふのは酷いわ。

タナア　何も悪いとは云やしない。然し善くても悪くても、僕はあなたの寸法に合はされる事が厭だつたのだ。僕は斷じてそんな寸法に合はされやしない。

アン　誰もそんなこと仕てくれと云やしないわ、あなた。私受合ふわ、——屹度だわ。——私あなたの其の變な主義など何んと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

も思つてやしないわ。私だつて小供の時から進歩主義の教育を受けて來たんだもの。あなたドッシテ私をそんな頑固な者と思つて?。

タナア　さあ、そこが危い所だて。無論あなたは何んとも思つて居ない、實際どうにでもなると思つて居るから。青大將が一度モゥ小鹿の胴を卷きしめて了つた以上は、其の小鹿の說なんぞドウでも可いんだから。

アン　(忽ちハッド氣が付いて立上り)　それで私分つたわ。あなたが先つきテビーに私の事を青大將だなんて云つたのが。私おぢいさんから聞いたわ。(アンは打笑ひながら長い青大將の樣な毛皮の襟卷をタナアの首に投げかけて)それ柔かで好い氣持でせう、れあなた。

タナア　(からまれた儘で)　悪黨女、あなたはモゥ僞善の面さへも脫ぎ棄てるんだね。

アン　私あなたに對して僞善なんぞした事ないわ。あなた怒つて?。(と、卷襟を解いて椅子に投げかける。)然し悪かつたわねえ。

タナア　(さげすみて)　ヘン、猫かぶりが!。面白いならするがいゝさ。

アン　(少しはにかみて)　だつて、――だつて私、あなたが青大將と云つたのは、此事だと思つたんだもの。(と、兩手をタナアの首に掛ける。)

タナア　(アンを睨みつけて)　素晴らしい鐵面皮なもんだ!。(アンは打笑ひながらタナアの頰を突ッつく。)僕が若しこんな事があつたと人に話して御覽、長話を聞くのが面倒くさいと思つて、フン〱云つて置く人は別として、誰が一人本當にするもんか。それにあなたが若し私の事を人に告口して御覽、僕か何と非認しても人が承知しやしない。それを思ふと本當に厭になつて了ふ。

アン　(さもしとやかにタナアの首より手を放しながら)　あなたは本當に仕樣が無い。だけど二人の愛情の事だけは冗談ぢやありませんよ。誰も思ひ違ひをしてる者はありやしないんだから、あなた思ひ違ひをしないで下さいよ。

タナア　僕の血が僕の代りに物を云つてらアれ。あゝ〱リキ・チキ・テビー!。

アン　(是に又ハット思ひついたらしく、急にタナアを打眺めて)あなた眞逆テビーのこと變に思やしないでせうれえ。

タナア　變に思ふ!。どうしてそんな事が?。だけどテビーがあなたに攫まれて居るのに無理は無いと僕は思ふ。僕は只あなたに弄ばれて居るんだけれど、それでも此の体中に段々網が卷きつく樣な氣がするんだもの。

アン　ぢやあなたは私がテビーに對してそんな積りがあると思つて?。

タナア　あると思ふさ。

アン　(眞顏になりて)　あなた厭ですよ。若しあなたがテビーにそんなこと思はせると、本當にテビーに氣の毒だもの。

タナア　大丈夫。テビーは逃げやしないから。

アン　マア!あなたは本當に利口な人なんだらうか知ら。

タナア　どうして今更そんな事を?。

アン　だつて、あなたは私の知らない色んな事を知つてるけど、私の知つる事に掛けちや丸で小供なんだもの。

タナア　僕はテビーがあなたの事をどんなに思つてるか善く知

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ってる。それ丈は確かだ、安心なさい。

アン　それぢや私がテビーの事をどんなに思つてるか、それも知つて?。

タナア　僕は只、テビーの身に今何が降りかゝつて居るか、善く知つてる。

アン　私ほんとに夢中で無かつたら、大きな聲であなたを笑つてやりたいわ。本當に氣をつけて下さいよ、テビーが可愛そうだから。

タナア　全く可愛そうだ。然しテビーにはそれが分らない。あなたに比べると、テビーは實に千層倍も好い人間だ。それだからこそ彼は今あなたに就いて一生涯の遣り損ひをしようとして居るんだ。

アン　私は又斯う思ふのよ、男は人が好すぎて遣り損ひをするよりか利口過ぎてモツト餘計に遣り損ひをすのだわ。(と、男性全部に對する輕侮の態度を、其の上品な肩のそよぎに見せて、椅子に腰かける。)

タナア　ウン、それは僕も、あなたが餘り深くテビーを思つて居ない事は知つてる。然し世の中には何時でもキスする人と、只キスをさせる人とある。テビーはあなたをキスする。あなたは只頰をそちらに向ける。そしてあなたは、外にモツト好い人があれば、直ぐにテビーを棄てゝ了ふ。

アン（怒りて）　あなたにそんなこと云ふ權利がありますか。嘘だわ、あんまりだわ。あなたとテビーとが幾ら馬鹿なこと考へたつて、私のセイぢや無いわ。

タナア（あやまる様に）　いや、暴言を吐いて御免なさい。あれは此の憎むべき世の中に對して發した言葉で、あなたに對した言葉ぢや無いさ。(アン顔を上げてタナアを見、機嫌を直す。タナアは直ぐに謹愼の態度になる。)然し兎にかくラムスデンが早く來ればいゝ。僕はあなたと二人で居ると何となく不安を感じる。あなたは妙に斯う一種の魔力を持つてる。イヤ魔力もない、一種微妙な引力を持つてる。(アン笑ふ。)そうら、あなたもそれを知つてる。そしてそれを得意にしてるんだ。公々然且つ洒々然としてそれを得意にしてるんだ。

アン　あなたも恐ろしいお世辭屋ねえ。

タナア　お世辭屋!! 僕が!!!

アン　えゝ、お世辭屋よ。あなたは何時でも人の惡口をいつて怒らせて居るが、それで居て決して其人を逃すつもりぢや無いんだ。

タナア　僕はモウ鈴を鳴す。此の會話をこんなに深入させる積りぢや無かつたんだ。

(次回にて第一幕終る)

日本に住み、
日本の國の言葉もて
云ふは危し
わが思ふこと

—黃昏に、哀果—

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愚劇フアウスト

貞、寒

■近代劇協會のフアウスを許するに當つて、僕は一つ當惑する事がある。それは、批評の對象を、舞臺に現はれたフアウスト第一部だけに限るべきか、それとも溯つてゲーテのフアウストまでも引合ひに出すべきか、若し引き合ひに出すとすれば、原作と演技との關係をどの點まで進むべきかと云ふ事である。

■近代劇では、イプセンにしろ、シヨウにしろ、吾々はその演技を批評するに、直ちに原作を規範とする事が出來る。そして是れが近代劇の近代劇たる第一要素である。フアウストの塲合では、それが不可能である、と云つて、全然原作と離れて了ふわけには行かぬ。

■こゝで吾々は、近代劇協會が、フアウストを興行した理由如何と考へなければならぬ事になる。しかし、それは姑く措くとして、吾々は、近代劇協會が、少なくともフアウストを近代的にモデフアイした事を認めなければならぬ、それが欧米の例を踏襲したに止まつたにせよ。さうすれば、吾々は、ゲーテの原作が、どれほど近代化されたか、若しくは、どれほど迄近代的解釋を容れ得るかと云ふ問題と、其結果が、近代人に訴ふる効果如何と云ふ問題とが現はれて來る。

■近代劇協會が骨を折つて、吾々に馬鹿々々しいと云ふ感じを與ふべき部分を削除したに拘はらず、舞臺の上のフアウストは、其統一を保つて行く爲めに、なほ幾多の馬鹿々々しさを殘さゞるを得なかつた。舞臺のフアウストが表はす思想は、人生は書籍の中にない、人生は人生の中にあると云ふ事である。是れは恐らく山嶽と共に古い思想である。しかして亦永久に新しい思想であるーその表現の樣式如何に從つては。實際吾々は、近代文學の中から、その多くの例を發見するに苦しまない。そして、その方が、西洋手品と、お伽噺と、ロマンチツクなラヴストリーとを織り交ぜた傍白澤山のフアウストよりも、吾々に痛切に共鳴する。吾々にはフアウストも、メフイストも、グレーチエンも、誰れも彼れも、骨を折つて、馬鹿々々しい眞似をして居る感が先きに立つ。是れは、近代劇協會の俳優諸氏の演出法が拙劣なのによるのではなく恐らく如何なる名優が演じてもかうであらう。溯つて云へば、ゲーテのフアウストなるものが、單に獨逸語として立派なものであつて、獨逸語を研究する上に必讀すべきものであると以外、極めて愚劣なものだからである。それを古今の大作の樣に云ふのは英國人が沙翁を擔ぐと同じく、獨逸人の國自慢か、或は、形而上學を無上に有り難がる文藝批評家の迷信に過ぎないのであらう（貞雄）

■ゲーテのフアウストは別に論じて居る通で、要するに中世基敎敎の迷信と、當時漸く勃興しかけて來た資本家的個人主義の偏見に囚はれた、メタフヰジカルな愚作に過ぎないが、近代劇協會のフアウストも亦、隨分と堪らない愚劇であつた。

■先づ源水の水藝、天一の手品、それに幻燈もあればお伽芝居もある。十五才以上の人間が見て、人生とか宇宙とかいふものにはブツからないが、子供が見たら屹度面白かつたに違ひあるまい。

■寄語す、近代劇協會の諸子、吾々が求めて居るのは、眞に人生社會と交渉あり關係ある演劇だ。面白オカシイ芝居が見たけりや曾我廼家が控へて居る、豈敢てゲーテと諸君とを俟たんやダ。（寒村）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新刊

■大日本閨門史（白柳秀湖著）

『親分子分』の『英雄篇』の時にも一寸云つて置いたが、由來秀湖の著書は、序文が少々えらすぎる。もう少し露骨に云ふと法螺を吹きすぎる。此の『閨門史』の序文には、比較的に本文に對する法螺は少ないやうだが、其のかはり御自分に對する法螺が、大分鼻につく。

本書は、先づ原始時代の男女關係と及び婦人の地位とに就いて、人類學的社會學的の豫備智識を與へて、後おもむろに日本婦人の社會的地位を、神代から德川の初期に亘つて、稗史的に、且つ多少の系統を與へて叙述したものである。母主的家族時代、自由結婚時代、唐風模倣時代、過渡時代、婦人道德崩芽時代、婦人の絕對的服從、婦人道德の固定の七章に分ち、其間に、盛んに、三面記事的みだしを並べて、例の絢爛華麗の筆致で、八百頁弱の大册を、何んの苦もなく、すら〱と讀ませる。此の手腕だけは、何人と雖も、まあ買つてやらなければなるまい。

嚴正な科學的意味で、『史』と云へる程のものではないが、讀んで面白い事此の上もない。（榮）（金貳圓五十錢・神田鍛冶町東亞堂）

■邦譯近代文學（野上臼川譯）

歐州に於ける近代作家の小說及び戲曲の飜譯集である。自分が一番面白く讀んだのはアンドレイエフの『マルセイユ歌』といふ短篇であつたが、譯者が西比利亞監獄に在る革命黨のよくやる飢餓同盟を、積極的の反抗手段であると知らないで、之に『斷食して罪を減じて貰はうとする習慣』といふ註を附したのは明らかに間違ひだ。ワイルドの『謎の女』、モウパッサンの『ベルサ』それからゴウチエの『木乃伊の片足』や、フランスの『マリヤの手品師』などを面白く讀んだが、ゴリキーの『カアン父子』、ツルゲネフの『あひゞき』、チエホフの『ねぼすけ』の如き、既に幾度か世間に公けにされたもの迄も譯してあるのは、寧ろ冗過ぎた勞力と云はねばなるまい。殊に『ねぼすけ』の中で、『バユシユキイ』といふ語に『ばあや』といふ譯が附けてあるのは、蓋し『バブシキイ』（即ち祖母）の誤まりであらねばならぬ。

巻末のショウ作喜劇『彼は何故彼女の亭主に嘘を吐いたか』は、徒らに騒々しい許りでいつものショウ一流の皮肉も警句も無く、只だクスグリ一方の詰らぬものだ。こんな物など、日本の大坂俄にだってザラにある、が是は譯者に向って並べる叱言ではあるまい。難を云へば譯文にや〻生硬の嫌ひある事だが、譯者の勞作は決して無意義なものでは無い。（寒）（金一圓二十錢神田南神保町一六尙文堂發行）

■畜生（道平出修著）

辯護士として、スバル派の文學者として名聲のある、平出修氏の短篇『公判』『畜生道』『計劃』『未亡人』『長町』『蹴ばな』『二黑の巳』等を收めてある。

『公判』と『畜生道』とは、善き意味に於ける社會問題小說といふ事が出來ると思ふ。氏が創作家としての透徹的な觀察を、一度その常に出入せる司法部に向ける時、裁判制度といふものゝ根本的迷妄は、ブリユーをして『赤き袍』を描かしめた如く、また氏をして『公判』を描かしめたに違ひない。然し、『計劃』には自分は寧ろ失望したと云はなければならぬ。すゞ子にも享一にも、作者は余りにセンチメンタルの色を附け過ぎた。その所謂計劃が堅い信念と道德的批判の上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

から來ないで、恐怖に對する強迫觀念と、同志の猜疑と嘲笑に對する感情的な反抗とから來て居る。だから、すゞ子や享一の悲壯な決心も、徒らに感傷的な氣分が附き纒つて居るのみで、些しも熾烈な狂熱的な處が無い。その同志の享一に對する態度の如きも、また尠なからぬ誤謬がある。然し、吾々は計劃の眞相に就ては、實は何も知つては居ない。故に若し親しくその徑路を研究した氏の描いた處に誤まりが無いとすれば、自分は只だ享一やすゞ子の感情を悲しむばかりだ。『畜生道』はやはり之と關聯した小說で、單に利害的打算の上から、此の事件の辯護を斷はつた或る有名な辯護士の、若い放縱な血をもつた美しい妻に心を占められて了つて、今はもう空虛な肉体丈けが生きて居るやうな心を描いたもので、モデルも大低それと當りの着く處が面白い。

畜生道一卷に收められた七篇の中、自分は以上の三篇を緊張した心もちを以て、最も面白く讀んだといふ事を記して置く。(寒)

(金一圓、京橋銀座三の八籾山書店)

■此一筋(沼波瓊音著)

丙午出版社の大正文庫第二篇として出された沼波文學士の短文集で、多くは俳句に關せる感想、論議、研究、及び俳文等を收めて居る。由來俳文と稱するものは一種の型があつて、厭に落着拂つた、そして悪く悟り澄した處の多いものだが氏の文には如何にも遣瀨の無い近代人の煩悶といふやうな焦燥した感情の閃きが隨處に見へて居る。だから、『鞭』だとか、『羽織の紐』だとか、『學者』だとかいふものは猶且つ新しい俳文に過ぎないが、『悔』の如き、『眞摯』の如きは、立派な短篇小說だ。

それから、種々な證左典據を博引旁證して、『芭蕉に妾ありき』といふ說を作して居るのも面白く、俳句の方面から「我が知れる鳴雪子」を書いて居るのも興味深い。若しそれ、『宣長の小說觀』に至つては、その玉の小櫛一二兩卷に於て、源氏物語を評價した本居宣長の所說の、如何に近代の文藝論と一致する處多き乎を縱橫に評論して、座ろに今人をして此の古の國學の大家の達見に服せしむるものがある(寒)(金七十錢、小石川區原町六丙午出版社)

■?之人(堀口熊二譯)

原著者はバアナアド・ショウ等と共にフェビアン・ソサイテイを建設した人で、また科學小說の泰斗として有名な理學士エッチ・ヂー・ウエルス氏である。原書は「インヴイジブル・マン』即ち『見へざる人』と稱し、科學の研究に耽つて居た一青年が光學上の原則を基礎として苦心慘憺の結果、全く身體を見へなくして了ふ方法を發明した。然し、此の新奇なる大發明は却つて身に災をなして、到る處に誤解され、猜忌され、憎惡され、迫害され放逐される。そして無二のコンフイデントとして、一切の秘密を打ち明けた一學者からは裏切られて、遂に敢なくも悲慘な最後を遂げて了ふといふ小說である。是は一寸見ると甚だ荒誕無稽のようだが、よく味ふと其處にウエルス氏の甚深なる寓意がある。即ち『インヴイシブル・マン』一篇は、新思想の闖入に對する社會的偏見の狂暴と、殘忍と、そして無益且つ悲慘なる犠牲とを暗示したものであつて、若し本篇に現はるゝ凡ての人が、インヴイジブル・マンを理解し、同情し、誘引したならば、自他共に非常な幸福を享くべかつたのである。一篇希くばソンジョ其處等の御方に呈せん。但し、譯文の拙いには恐れ入る。(寒)金八十錢神田區鍛冶町八、東亞堂)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

四月の小說

寒

■樂園（田山花袋）　花袋の小說は昔は必ず峠の茶屋に娘が居た、中頃には屹度田舍路で旅人が村の娘に絹表紙の絹本を見せた、此頃ではいつも犬が噎をしたり猫が香箱を作つたり人が飯を食つたりして許り居る。こういふ人に些しでも意義のある、痛切に人生社會と接觸した作物を望むのは、或は此方の無理かも知れないが、一体何だい此の『樂園』といふ小說は？、男と女と逢引する、その中に男が下の娘と私通する、それ以外何の意義も有りやしない。そして、ヤレ街には灯が點つて居たの、ソレ男と女とが步いて居たのと、いつも概念的な、抽象的な文字のみのチヤラツポコを書いて居る。『そこでは太鼓が鳴つて居た、ドンドコ、ドンドコー』、四十面を下げてよくもこんな小供の片言見たやうな、馬鹿々々しい文句が並べられた物じやない乎。困り物だネ全く！（中央公論）

■京極（長田幹彥）　ショツ中云ふ事だが、此人の書く小說は色情狂者の筆に成つた物としか思はれない。是れなども京都で散々をして借財を拵へた若い男が、久しぶりで大坂から歸つて來たものゝ、零落し切つて動きが取れず、或る女義太夫の世話でその仲間の家に間借する事となつたが、或る晩酒に醉つて女の手を握り『如何かして、如何かして』と云つて泣くといふのだ。よくキマリが惡くも無く、こんな下らぬ事ばかり書いて居られるものだと思つて呆れ返るが、然し無政府主義の哲學も知らなきや社會主義の理論も解らず、社會學も經濟學も芋の煮えたの一つ御存じないバカ旦那さまなのだから、考へて見れア無理も無いカ。（同上）

■戲作者の死（永井荷風）　荷風が歸つて來た時分、ヤレ觀察が淸新だの、ソレ筆致が纎細だのつて、隨分褒めそやされたものだ。然るにその荷風が、『武士が突袖で通れば小僧は包を背負つて過ぎ、藝妓が褄をとつて急げば犬は吠え乍ら奔る』と云つたやうな、小學讀本にでもありそうな、類型的な文句を並べてお茶を濁すやうになつたのを見ると、吾々は實に荷風先生をして斯の如き愚劣凡庸な文字を弄せざるを得ざらしむる、日本語の不完全にして貧弱なるに慊して以て慨せざるを得ぬ。然し、そんな處は實は如何でもいゝので、『花魁、余り身を入れて見なさると、飛んだ勤めの邪魔になりやす。』なんて、江戶時代の戲作者でなければ如何でも使へぬといふやうな語などと來ると、先生は實に當代の第一人者である。大正隨一の戲作者である。乃木將軍と共に日本國の國寶である。（三田文學）

■變化物（邦枝完二）　ヨタ小說として見れば一寸面白い處もあるが、皮肉として見ては何の變哲も無い詰らぬものだ。殊にワザと突飛に、無理にお可笑くしやうとする、誇張した書き方が尠なからずキザである。そしてこんな物には『皆さんは如何も囚はれて居るやうです』なんて演說なんかさせるのは、やつぱりイカンね。（同上）

■武士道（上司小劍）　例の小劍一流の皮肉なもので、殊に是には皮肉が極めて明白露骨に出て居る處が面白い。只だ、祭禮の時、村の若者が亂暴するのを罵つて『武士道なんて卑怯な物さ』と云ふのが餘り突然で、何だか緣も由緖も無い武士道鼓吹の浪花節と、無理に結び付けられたやうな氣がして滑稽だつた。（早稻田文學）

■牢獄（中村星湖）　Mといふ文學者が、直接の責任者となつて或る雜誌の經營に當るやうになつてから、脅喝取　を犯して遂

に入獄の身となる——その無意識に、漸々深みへ箝つて行くメンタル・プロセスが、ピッツドに描出されて居る。只だ一言、敢て作者の名譽の爲に御注意申し上げる。それは公判廷の事を一再ならず豫審廷と記し、おまけに念を入れて豫審廷へ傍聽に往たとまで書いてあるが、誠にお恥かしい話だが、日本の裁判制度は、まだその豫審廷を公開する程、開けて居ませんでしてネ。(同上)

■お冬さんの話(小林歌津)　下町の、藝妓なぞが大勢結ひに來る、女髪結の家で、『末吉』(藝妓屋か待合か、二者その一だ)のお冬さんが、永い間の旅廻りから歸つて、やつと名題になつて東京の舞臺を踏むと、幾程もなく死んだ榮次といふ俳優と自分との、昔の戀物語りをするといふ話だ。巧いとか拙いとかいふ事は暫く擱く、單なる小說道樂の團體ならばいざ知らず、苟くも女性の個人的完成を理想として居る、然もそれが一個人の意見でよく、靑鞜社そのものが存在する可なり重大な理由である靑鞜に、こういふ單なる下町趣味の小說が載つて居るのを見る事は、少なからず妙な感を起させる。(靑鞜)

■かくれんぼ(山川亮)　一少年がやゝ年上の一少女に童貞を破られ、且つ惡疾まで受けたので、煩悶して遂に自殺するといふのだが單にそれだけの事で、果して自殺する迄に考へが病的になるものか如何かは暫く疑問とするも、尠くとも作その物のエフエクトは吾々に滿足を與へるものでは無かつた。自分は作者が單に個人の心理描寫のみに頼らず、更にこういふ事實に對する社會的プレヂユヂスを對照させ描出したなら、初めて人に迫るやうに强い力が現はれたのであらう。序に記す、奇蹟四月號は風俗壞亂の廉で發賣禁止を命ぜられたそうで、自分は反覆熟讀したが、如何いふものかそういふ個處は見付からなかつた。(奇蹟)

■情死(淸見陸郎)　零丁落魄、放浪の旅から歸つた男が、情死した昔馴染の娼妓を思ひ出して、『曲輪へ、曲輪』てな事を云ひながら吉原に向ふ。それがサ、今ならその女と情死でもし兼ねない意氣込みなり、煩悶して居るなりの男が、途中で新内だか淸元だかの流しを聞いて、『蘭蝶』をウナるなんかといふ、隨分人を茶にした小說だ。(モザイク)

■寄贈雜誌■

馬上大學(創刊號)　實業之世界
新公論　婦人評論
内外教育評論　朱欒
帝國文學　奇蹟
モザイク　新潮
新佛教　人生と表現
早稲田文學　東京魁新聞
白樺　新東京
スバル　野の聲
劇と詩　ニコ〱
村落通信　靑鞜
鑛業及鑛夫　獨立評論
公友新報　海鳥

■四月號目次■

社會か監獄か(詩)……………榮
創造的進化(評論)…………大杉榮
卑怯者の文學(評論)………荒畑寒村
旅情(詩)…………………土岐哀果
畫廊にて(詩)……………佐藤綠葉
金を懷に入れて(詩)………上山草人
腹が空つたあ(對話)………榮
トルストイの思想(詩)……寒村
ハサミ將棊(感想)…………上司小劍
ファウスト論(評論)………荒畑寒村
超人の戀(評論)……………大杉榮

大久保より

榮

■前號に豫告してあつたやうに、廿日の午後社同人の講演會を催す筈の處、その筋からの干渉があつたとかで、青年會舘から會場貸與を拒はつて來た。早速神田の錦町警察と警視廳とへ行つて、その事實を問ひたゞすと、何れもそんな干渉は出來もせず又する筈もないと云ふ。そこで、若し警察が改めて差支ないと出へばお貸しすると云つた青年會舘へその旨を通じると、こんどは會場がふさがつてゐるとぬかす。猶二三の會場を問合はして見たが、何れも近代思想社講演會と云ふ名を聞くと、急に妙な顔をして、何んとか彼んとか不得要領な事を云て拒つて了ふ。それで至急各新聞社へ中止の通信を出したが、大概の新聞は、『其筋の干渉により』と云ふ一句を削つて了た。新聞つてものは妙なものだ。

■そんなこんなで隨分奔走したり忙かつたりしたものだから、僕は雜誌の方を丸でなまけて了つた。そして本當の編輯者になつて編輯の雜務をやつた外には、殆んど何んにも書けないで了つた。來月からは大いに勉强します。

■ことしの始め頃から、ちよい〳〵僕の所に遊びに來た、一士官學校生徒があつた。馬鹿共の集つてゐる軍人としては、なかなかよく話が分る。僕にはもう愛國心なんてものはない、たゞ飯を食ふ一方便として將校になる、と云ふやうな事を話した事もある。處がその軍人が、とう〳〵この二三日前に、危險思想を持つてゐると云ふ理由で、もう來月卒業と云ふ處を、退校を命ぜられて了つた。死んだ横田兵馬も幼年學校を卒業する間際に、矢張危險思想のかどで退校させられたのだつたが、その後ノナーキストになつた。

■十九日の夜、近代思想社第四回小集を、例の鴻の巢に開く。集まるもの、

久津見蕨村　平出修　片山潜
和氣律次郎　安成貞雄　安成二郎
堺利彦　佐藤綠葉　仲木貞一
荒畑寒村　小原愼三　大杉榮

■前回には大ぶ同人とお客との論爭があつたが、こんどは盛んに仲間喧嘩をやつた。シヨウ論、ガルスワーシー論、メーテルリンク論等相續いて出で、最後に精神病論及びメンデリズムに終る。そしてその間餘興として、例のエヂユケーテド・ヨタリスツが、盛んにサイエンチヒク・ヨタをヨタる。初て來た蕨村は、同人の博學多才に驚いて、これからは是非毎月勉强をしに參會すると云ふ大變な事になつた。

■十六日の午後、日比谷公園器械體操場の茶屋で、堺利彦野澤重吉の發起で、平民會と云ふものが催された。集まるもの四十餘名。猶外にも、隅の方に私服の警部さんが二人、屋外のベンチに『お供』が十人あまり控へてゐた。五錢の會費でみかんとせんべいとすしとを食つて、齋藤兼次郎の尺八、添田平吉のよみ讀り歌、蓄音機と云ふやうな餘興で、半日遊び暮らした。

■大島へ行つてゐた德永は、本月の始めに歸つて來た。

■佐藤悟は出獄後歸國してゐたが、此頃又上京した。

■不敬漢福田狂二は、兵役と懲役と合せて七ケ年の後、漸く先月上旬に除隊して、今は出雲の郷里にゐる。

■廿日の朝、吉川守邦の妻君が死んだ。

■六月から尾竹紅吉が雜誌を出す。和氣や貞雄や寒村や及び僕なども寄稿する筈。

■西川文子等の新眞婦人連中　、五月から雜誌新眞婦人を出す。（二十二日）

地六社復刻版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

注意

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。

■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。

■廣告料特別一頁十五圓普通十圓。

■本社振替貯金番號一七一六三

大正二年四月三十日印刷納本
大正二年五月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　敎文館印刷所

大賣捌所
東京堂　東海堂　上田屋　北隆館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

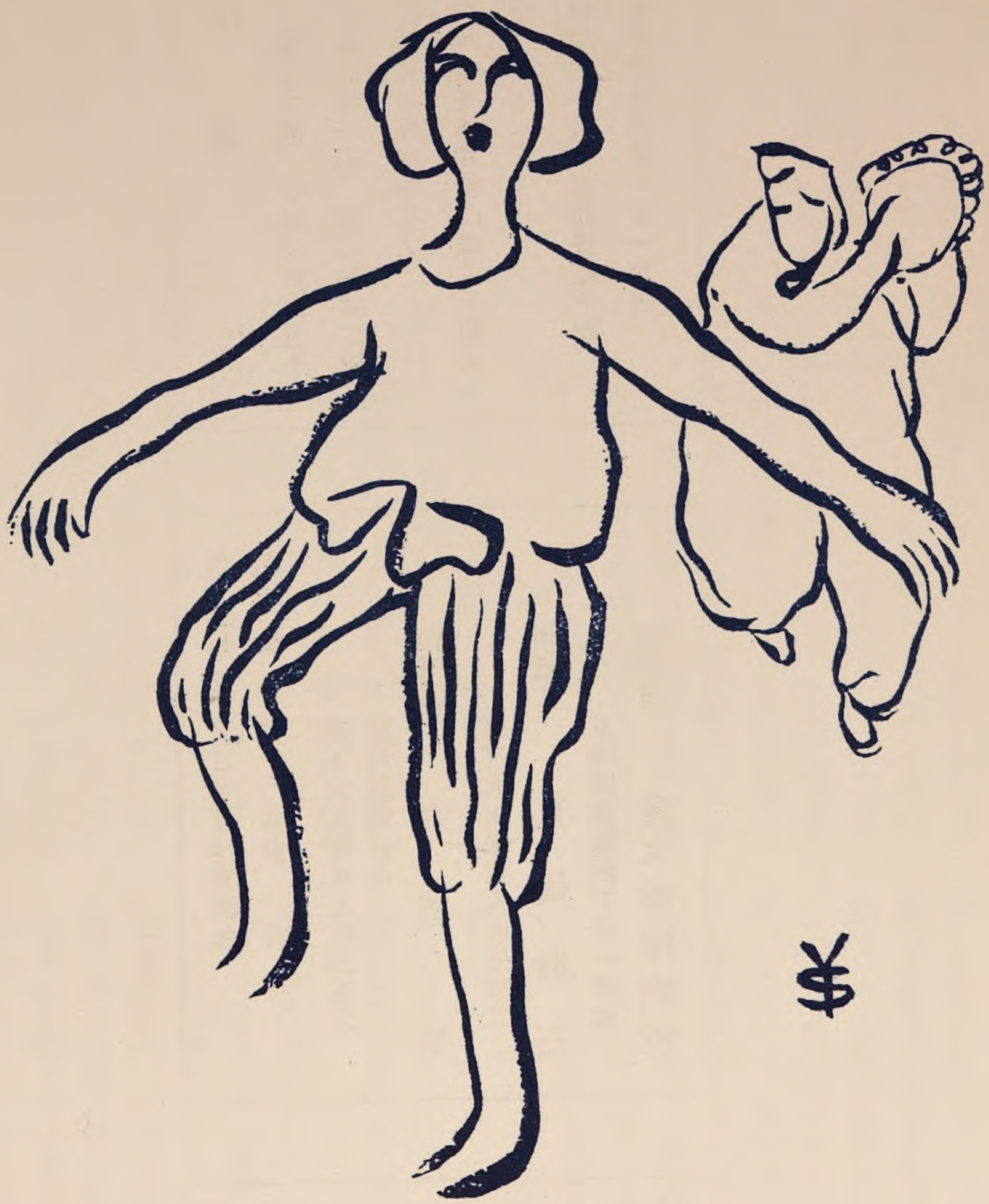
近代思想

第一巻第八號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年四月三十日印刷納本（大正二年五月一日發行）

五月號

金十錢



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

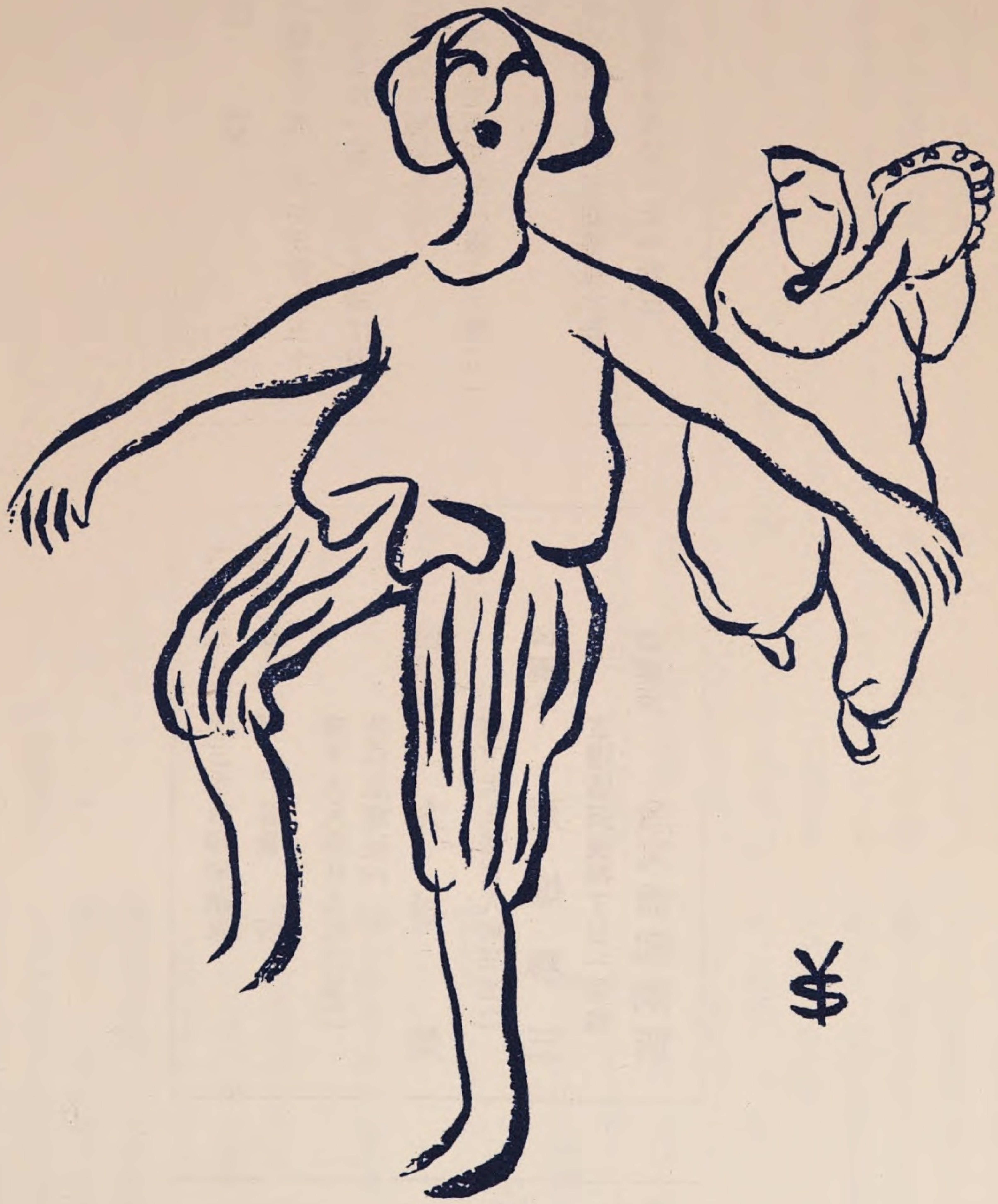
Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想

第一卷第八號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年四月三十日印刷納本（大正二年五月一日發行）



五月號

金十錢